聖竜の姫巫女?

ルシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
聖竜の姫巫女？

【Ｎコード】
Ｎ３０７３ＢＡ

【作者名】
ルシア

【あらすじ】
大神官エルヤサフの口より、第四の巫女であったミュシアが姫巫女として生きていると聞かされ、彼女の存在に一縷の希望を見出す神官のルーク。一方、そのルークの名を騙りつつ、王都カーディルへ辿り着いたミュシアは、センルやシンクノアとともに王立図書館へ向かう。センルはカルディナル王国のブリンク、エリメレクとともに禁術許可の許しを＜円卓の魔導士＞から得るなど、姫巫女であるミュシアのために影で動くが、＜聖竜の盾＞の継承者が横槍を入れてきたことにより、彼の計画には若干の狂いが生じてしまう…

。

第1章　大神官エルヤサフ

光の女神ルシアと、聖竜ルシアスを祀った神殿の敷地は、それぞれ縦の長さが４．４エリオン（１エリオンは約１ｋｍ）、横の長さもまた４．４エリオンあり、ちょっとした町か村がひとつおさまるくらいの広さがあったと言えるだろう。

ルシア神殿の裏手には、巫女や女神官たちの住まう建物が並び、ルシアス神殿の後ろには神官たちの住居と牛や羊などを飼う放牧地がなだらかに広がっていた――そこには野生の鹿なども住まっていたが、この＜聖地＞では当然のことながら狩りは禁止されている。

そしてルシア神殿とルシアス神殿のちょうど中央あたりに、将来巫女や神官となることを希望する子女の集う「聖契学院」があるのだが、この学院の院長は代々、ルシアス神殿最高位の地位にある大神官が務める慣わしとなっていた。

第六十一代聖契学院の学院長にして、大神官であるエルヤサフ卿は、第十三の月に神殿前に捨てられていた孤児であり、学院時代は成績のあまりパッとしない、実に目立たぬ聖徒であった。そんな彼がいわゆる神の御意志――神意により、一神官にすぎぬ身から大神官へと権力の最高位にのぼりつめたことは、ただ運命の悪戯としか呼びようのないことだったかもしれない。

ルシアス神殿の神官の位は、大神官（大僧正）、司教、司祭、僧正、僧侶、神官、神官見習いの六段階である。聖契学院を卒業し、神官見習いとなった者がまず就く仕事は、十二州に分かれているルシアス王国をそれぞれ治める、十二大公が毎月献上する神殿税を規律正しく区分するというものであった。

すなわち、第一の月であるハゼルには、ルクセリア州の大公が牛や羊や山羊、その他革製品や布製品や染料といった細かく規定された奉献物の他に、その州の人口に従って納めなければならぬ神殿税を上納するために、大公自身が長い家臣の行列を率いて聖都までの

ぼって来るのである。そして第二の月のアゼルには、同じように今度はルクシェント州の大公が、第三の月のマゼルには、ルムナディール州の大公が、第四の月のカゼルには、ルキンエネム州の大公が、第五の月のニガルには、ルネルヴァ州の大公が……といった具合に、必ず月のはじめに、ルシアス神殿にはたくさんの家畜や物品や金貨などが納められ、それを記録・保管するのが神官や神官見習いの主な仕事ということになっていた。

エルヤサフは聖契学院の聖徒であった頃から、あまり信仰熱心なほうではなく、自分はたまたま「神意により」第十三の月に神殿前に捨てられていたから、いわば成りゆきのようなもので神官職に就いているにすぎないと考えていた。出世といったものにもまるで興味はなく、自分は一生このまま、毎月牛や羊や山羊の数を数え、家畜の世話をして終わるのだろうと思っていた……そんな彼の人生が変わったのは、先代の大神官に夜な夜な可愛がられるようになったからに他ならない。

エルヤサフは紅顔の美少年で、大神官は他のどの少年よりも彼をもっとも贔屓にし、愛していた。以来、彼は僧侶、僧正、司祭、司教へと、特にこれといった功績もなしに出世の階段を順調に上っていき――最後には、彼に性的虐待を長きに渡って施した男の指名により、大神官の位を継ぐということになったのであった。

エルヤサフは六十五歳という年齢に達した今、自分の人生を振り返ってみて（まったく奇妙なことだ）と感じている。彼は先代の大神官のシャドミエルが、自分のことを屈服させた夜以来、もともと中途半端にしか持っていなかった信仰を完全に捨てていた。そしてどこまでも神に挑戦するという道を選び取ったのであるが、自分の計略がうまくいけばいくほど、彼は神に対する深い畏敬の念を感じずにはおれなかったからである。

聖都ルシアスが陥落した夜、王城から竜が火を吹くあり様を眺めながら、エルヤサフは（燃えろ、燃えろ、もっと燃えろ！！こんな腐った土壌に建つ都など、灰になってしまえ！！）と、一種の狂気

じみた歓喜とともに心の中で叫んでいた。
　彼がいたのは王城にある、南に面した塔の一室で、そこにはレグナ大公とユージェニー女王とが、エルヤサフが見ているのと同じ光景を、彼とは違い、恐怖を持って見つめているところであった。
「わたしは、こんなことは聞いていないっ！奴ら<地の崖ての民>とやらは、姫巫女の御身のみをさらい、都には手出しはせぬと誓約していたのだぞっ！！」
「まあ、これはこれでよいわ」
　ユージェニー女王は、姫巫女の非業の死がよほど嬉しかったのであろうか、目の前で自分の治める国の民草が逃げ惑おうと家をなくそうと、あるいは命を落とそうとも――眉ひとつ動かさぬ素振りであった。
「もしあのまま、ルシア神殿とルシアス神殿がそのまま残っておったらば、民たちが姫巫女の再臨を是非にとわらわに望んでおったろうからの。じゃがまあ、姫巫女は死に、十二人いる巫女も、レイヴァン、そなたの娘サフィをのぞいて命を絶つか神官どもに殺されるかしたろう。これぞ、わらわが多年に渡って望んでいたことじゃ。あの目障りな巫女どもさえいなくなれば……ルシアス王国はこれからもっと栄えることであろうぞ」
「したが、ジニー」
　女王の従姉弟であるレイヴァン卿は、彼女のことをそう愛称で呼んだ。
「ルシア神殿とルシアス神殿は、これからも形式上は必要であるのだぞ。我が娘サフィを姫巫女の位に就け、その後も我々にとって都合のいい巫女を選定していく必要がある。それから、神殿税の横流しについては――」
　ここで、レイヴァン卿は狐に似たずる賢い目つきで、エルヤサフのほうにちらと視線を送った。
　エルヤサフは、竜どもの吐く息にはいくつか種類があることに気づき、その赤や紫といった炎の色に魅入られたような眼差しを注い

でいたのだが、レグナ大公の視線に気づくと、瞳から狂気の色を消し、彼のほうを振り向いた。
室内には精緻な模様の描かれた絨毯が敷かれ、部屋の中央にある螺鈿細工の施されたテーブルには、最上級のワインとグラスが並んでいる。女王は、窓の外の竜の炎から目を離し、象牙の暖炉に燃える赤い炎のほうに視線を転じると――その上に描かれた若き日の自分の肖像画と、白いユニコーンの紋章旗をしばしの間眺めやった。白のユニコーンこそは、ルシアス王国を象徴する紋章だったからである。
「お約束どおり、神殿税については、うまく女王陛下に上納いたしますこと、このエルヤサフ、心からの忠誠にかけて誓いますぞ」
エルヤサフは自分でも、心にもないことを言っているとわかっていた。それは、神殿税を横流しする気がさらさらないということではなく、単に彼は人間としてユージェニー女王のことも、レグナ大公のことも好きではないのだった。
何かの運命の間違いにより、今自分は大神官などという地位に就いているが、もともと彼はただの孤児であり、それも第十三月という忌み月に生まれた子なのだ……そんな汚らわしい平民以下の人間と、本来ならば彼らは口を聞くことすら厭ったに違いない。しかしながら、こと金というものが絡むと、そのような些事は、貴族にとってさえあまり心を煩わす原因とならないようだった。
「そうよのう。汝ら、神官たちというのは、毎月毎月十二大公の神殿税の処理に押し潰されて、吐き気を催さんばかりだろうからの」
ユージェニー女王はその日、灰色がかったラベンダー色のドレスを着ていた。まだ五十代ながら、その髪には白髪が混ざっていたが、その黒と白の髪のコントラストに、ラベンダー・グレイのドレスは実に映えていたと言わねばなるまい。若き頃の美しさは去り、その目許や口許には小じわが目立ったが、それでも彼女が「その気」になりさえすれば――女王は今も、うら若き男どもが何かを勘違いしてしまうほど、妖艶な笑みを浮かべることが出来た。

「さようでございます、女王陛下」
　エルヤサフは恭しくお辞儀をしてから、ユージェニー女王の斜め前の椅子に座った。隣のレグナ大公がワインを注いでくれると、エルヤサフは酒類を禁じられている聖職者であるにも関わらず、良心が痛むでもなく、大公と祝杯を上げていた。
「あの＜神殿税＞というのはまこと、意味なきものでございますよ。それに、十二大公はおのおの、自分たちの捧げ物こそ全十二州きって最上のものとすべく、毎年凌ぎを削っているようなところがありますからな。かわりに彼らは姫巫女から託宣を受け、州を維持していくに当たっての神の言葉を受けたりするわけですが……レグナ大公、あなたには毎年、さしたるお言葉もないのでしたな？」
　エルヤサフにそう指摘され、レイヴァン卿は暫しの間不機嫌そうに押し黙った。そして内心エルヤサフは、（この茶色い髪の狐めが！）と彼のことを蔑んでいたのであった。
　レイヴァン＝レグナは、ワインの名産地を抱えるルクシェント州の貴腐ワインの芳香を楽しみながら――それを一口味わうと、再びワイングラスを落ち着かなげにくゆらせはじめた。
「わたしは毎年、あの姫巫女殿に同じことを言われ続けて来たのですよ。『私はあなたには何も言うことはない。自分の道を進んでいかれるが良いだろう』とね。ですが姫巫女は、ルクセリア州やルネルヴァ州の大公には、流石は姫巫女さまというような、素晴らしい御言葉を多く授けているのです。そんなことまでは神でもなければわからぬだろう、といったような言葉をね。お陰でわたしは彼女の託宣通り、己が道を進んでここまでやって来てしまったというわけだ」
（ふん！何を言うか。このこそ泥の小心者の狐めが。姫巫女の託宣が貴様になんらの益ももたらさなかったのは、貴様の性根がそれだけ腐っているからよ。言っても無駄なもの、意味のないものには、神の恩恵など与えるだけ無駄というもの。その点はユージェニー女王も同じこと……本当はただの女のくせに、自分は女王だ、聖竜の

末裔だなどと、その地位の上であぐらをかいているから――そのようなものは結局、神から何も得られはせんのだ）

そこまで考えて、エルヤサフはふと、自嘲の笑みを顔に浮かべた。自分もまた、こやつらと同じ穴のムジナ、地獄へ落とされるべき罪人であることを思いだし、もはや取り返しのつかぬ道に大きな一歩を踏みだしたことを、あらためて感じたからである。だが彼は、炎に包まれた聖都を眺めやっていてさえ、そのことを微塵も後悔してはいなかった。

その後三人は、今後のこと――こうなった以上は、ルクシンドラになるべく早く遷都すべきであるという計画を、どうやって速やかに押し進めていくかを綿密に話し合った。ルシアス王国第三の都と言われるルクシンドラには、もともとルシア神殿・ルシアス神殿の本殿に次ぐと言われるほどの大神殿があり、そこでは生臭な神官と堕落した巫女たちとがうまい具合に神殿運営に当たっているのであった。

エルヤサフは、ルクシンドラ神殿の大神官の地位にあるシェルミエルと懇意にしていたし、彼もまた自分と同じ男色家であることも知っていた……だが、これらすべてのことを通してもエルヤサフは、（これぞ、神などこの世に存在せぬ証拠よ）などと考えてはいない。といよりも彼は、＜滅び＞そのものをずっと待ち望み続けていたのだ。どのくらい悪というものが積み上がれば、神とやらはその重い腰を上げて人間世界へ介入してくるのか――彼はそのことを試してみたいと不遜にも考えていたのである。

盗っ人や簒奪者のような罪人と、心清らかなる会合を終えた後、エルヤサフは妙に清々しい気持ちで王城内にある自分の寝室へ戻ることにした。神殿内の様子を探らせていた側近のひとりを呼び寄せ、彼から聖竜の槍が＜地の崖て人＞に奪われたこと、また聖なる槍を守ろうとして、その過程で何人もの神官が討ち死にしたこと、また竜騎兵が三十数名もの神官たちを捕虜として捕えていったという報告を受けた。

「して、ルークはどうした」
聖竜の槍は、出来れば奪われたくなかったというのが、エルヤサフの本音ではある……そして彼は、ルークか、あるいは師範のひとりであるラミアスあたりが、聖竜の槍を手に取って敵を撃退せしめるのではないかと期待していたのだ。
「それが、あと今一歩というところで敵に追いつめられてまして、最後は相手に情けをかけられるという形で、彼自身は傷を負いながらもまだ生きております。ただし、ラミアスさまは、銀の髪に紫色の瞳をした男に討ち取られ、落命されました」
「そうか……」
（あのふたりの力をもってしても、無理であったか）――そう思い、エルヤサフは顎の白い髭を何度もしごいた。ルークというのは、実は彼が肉欲的なことを抜きにして、もっとも目をかけている僧侶の青年であった。
彼には誠の信仰心なるものがあり、自分の手にかけることで、その信仰心を堕落させてやろうとエルヤサフは邪心を抱いたこともあったが、今はそれよりもさらに良い計画が彼の脳裏に閃いていた。これからのち、おそらく自分はルクシンドラにある神殿で大神官の摂政的地位に就くということになるだろう……そして、次代の大神官には必ずルークのことを指名しようとエルヤサフは考えていたのである。
（あやつの操りにくい潔癖さを、レグナ大公はどうされるかな。そしてルークもまた、穢れきった神殿を粛清するのに、気が狂いそうなほどの思いをすることだろう。だが、もし本当に神がいるのなら、新しい時代といったものは必ず開けていくに違いない……）
エルヤサフはとりあえず、ルークが生きていたと聞いて満足した。彼の＜棒術演舞＞はまことに見事で洗練されており、あれが二度と見られぬと思っただけでも、エルヤサフには痛恨の極みであった。師のラミアスを失い、今ごろ悲嘆か復讐心に暮れているであろう彼の純粋な心を想像してみただけで――エルヤサフは手の内が汗ばむ

ほどの興奮を覚えたものである。
（さて、と。とりあえずこれからもわしは、ルークが軽蔑するような汚れきった豚のような生涯へと邁進してゆこう。そしてわしがすべての穢れを引き受けて天寿をまっとうした時――神はわしをどうするであろうな。「底知れぬところへゆけ」と命じられるであろうとは思われるが、この世に＜悪＞といったものは、かような形でも必要なものなのだ）
　エルヤサフは当然、自分が詭弁を弄するただの老人であることをよく自覚していた。ただ、彼自身は己の過去を振り返ってみて、こうも思うのだ……「一体自分に、他にどんな生き方があったのだ？」と。自分が神殿に生まれたも同然な身ながら、中途半端な信仰心しか持ちえていなかったがゆえに、シャドミエルのような男に犯されることになったのか？それを神は見て、知っていながら、何十年も放置し続けたというのか？そもそも、自分のことを両親が捨てなければ、大神官になることもなく、その場合自分は一体どんな人生を送っていたのか――今よりもずっと若い頃は、エルヤサフもこうしたことを繰り返し自問したものだった。
　だが、彼はその答えを求めるのが意味のないことであると、とうの昔に知っていた。それに、裏切りの歯車はすでに動きはじめてしまったのだから、その最後がどうなるのかを命ある限り見届けたいというのが、エルヤサフが今もっとも望んでいることであった。その後、己の罪ゆえに地獄へ落ちるであるとか、そこで永遠に消えぬ業火で焼かれるといった情景は、彼の心になんの感銘ももたらすことはない。
　地獄で火の池に溺れながらも、神の実在に感謝することは可能かどうか、そのような観念論によってしか、エルヤサフは聖書で言われる天国や地獄といったものを想像することが出来ない……そして彼のその想像によれば、火の池で焼け爛れ、針の山で串刺しになっている罪人を尻目に、天国で安らぐことの出来る人間などはみな、所詮偽善者でしかなかった。

天国へいけた者が、そこへ行けなかった者のために執り成しの祈りを祈ってこそ、すべての人間が救われるのではないか？――神がもしそのような存在だというのなら、自分もまた涙にかき暮れながら心から懺悔できるものをと、エルヤサフはそのように感じるのであった。

なんにしてもこの夜、エルヤサフは王城の贅沢なしつらえの寝室で、大いびきをかいてぐっすり眠った。ユージェニー女王やレグナ大公が怯えていたように、彼は竜がもし王城をも襲ってきたら……などとは、露ほども想像しはしなかった。何故ならそれで自分が死ぬことになったとしても、エルヤサフは少しも後悔などしなかったろうからである。

ただし、その場合は出来ることなら、ユージェニー女王とレグナ大公の胴体が竜の牙に引きちぎられるところを見てから死にたいものだとは、思っていたにせよ。

聖ルシアス歴、１１８９年の第十二の月――聖都では、奇跡が起きたと人々の間で噂されていた。

通常であれば三月頃、春の先触れを知らせるように咲くユニファの白い花が、ルシア神殿・ルシアス神殿が元あった場所に、一夜にして満開の花びらを咲き誇らせていたからである。

ユニファというのは、アーモンドの花によく似た、芳香性のある白い花で、長い冬が終わったあと真っ先に咲くことから、ルシアス王国では国花とされており、また姫巫女の純潔を象徴する花としても人々から愛されていた。

僧侶のルークは今、噂の真偽を確かめるために、かつて自分が寝起きしていた神殿跡地に立ち、竜の炎で焼かれた黒い土地がすべて、ユニファの白い花弁によって埋め尽くされているのを眺め、自然、涙が頬を伝っていくのを止めることが出来ないほどだった。

（姫巫女リリアさま！！ラミアス師匠……！！）

その他、ともに槍術と神学を学んだ同窓の死んだ友のことを思い、ルークは一夜にして生えたという薄茶色の樹木の間を、夢見るような心地で通り抜けていった。

ふとした瞬間に、失った友が木陰から姿を現すのではないかとすらルークには思われたが、心の激動が去り、涙が一通り流れ落ちると、彼は再びいつもの深い物思いの中へ捕われていった。

（大神官エルヤサフさまは何故、遷都に賛成なさったのだろう。確かに、竜の放った炎の力により、聖都ルシアスの大地は灰燼と帰した……この黒と灰色の土地の上に再び建物を建てたとて、姫巫女さま亡き今、かつての栄光と繁栄が再び戻ってくるわけではないということも、一応理屈としてわからぬではない。だが、我ら神官がここを離れてどうするというのだ！むしろ我々こそがここに残り、再び大地を再興させ、民の範となる姿勢を示すことでこそ、もう一度多くの民草が故郷へ戻って来ようというものではないのか？）

ルークは、ユニファの花が狂気の如き白さで咲き誇る樹間を、幻の中を歩く人のように、ぼんやり歩いていった。そして、花芯にほんのりとさす薄桃色の筋に目を留めると、枝のひとつに口接けした。

ルークの目撃した限りにおいて、竜は数種類の炎を操れるらしく、その中でもっとも高温である紫色の炎――それが石造りの建造物の上に吐かれると、見る間に黒焦げとなっていったおぞましい情景を思いだした。聖都ルシアスには、木造作りの建築物は少なく、ほとんどが耐火性のある石造りである。にも関わらず、竜の炎はそんなことにはお構いなしに、ほんの一瞬にして千年もの歴史ある建物郡を次から次へと破壊していったのである。そして石が崩れずに残ったものに関しては、竜の鋭い爪や荒々しい尾がものを言った。その上、竜の吐く火炎にさらされた大地というのは、土地が幾層にも深く犯され、そこにこれから何か植えたとしても、あと七年は取り入れが不可能であるように思えるほど――毒されて、消し炭のようになってしまうのである。

ルークは竜が神殿の外で暴れまわっている間、ルシアス神殿の地

下最下層にある＜聖竜の槍＞を守るため、師であるラミアスや他の神官たちとともに、普段手にしている使いこんだ棒ではなしに、先端に鋼の刃の着いた本物の槍を持つということになった。
神官たちが常時体を鍛え、棒術に打ちこんでいるのは当然、神殿にこうした危険が訪れた時、姫巫女をはじめとした巫女たちや女神官、またさらには＜聖竜の槍＞を守るためではあったのだが――あまりに長く平和が続いたためであろう、神官の中には敵とはいえ、人を殺すという行為にためらいを持つものが続出、地下の第一階層、第二階層もすぐ突破され、早くも第三階層の扉を残すのみとなってしまったのである。
その石造りの堅牢な扉の前で、じりじりと後退しつつも、ルークは何人かの竜騎兵を打ちしとめた。打ちしとめた、などといっても、殺したということではなく、うまく隙を窺って、鎧で補強されていない頸部などを槍の柄で殴打したということだった。
「手ぬるいな」
蒼の冑から白銀の髪を流し、紫の深い色の瞳をした男は、自分の脇に部下がひとり倒れたのを見て、そう呟いた。
通路は狭く、常に一対一でしか渡りあえないよう工夫して設計がされている。もし外敵が侵入して来た場合は、棒術師範たちが＜聖竜の槍＞を守るべく、ここで敵とうまく渡りあって倒せるようにという意図があるのだろう。
「どうやら彼には、並大抵の者では拉致があかないようだ。このままではただ徒に時間を浪費するだけ……一応先に忠告しておくが、俺には峰打ちなどという甘い技は通じないものと思って、本気でかかってきたほうがいい。それが、部下たちの命を奪わなかったことに対する、俺のせめてもの気遣いだ」
そう言うと男は、蒼い冑をとってさえ寄こした。廊下にかかる松明の光に、銀の髪に縁取られた若い男の顔が浮かび上がる。
（……出来る！！）
ルークは相手の槍の力量を瞬時にして推し量り、少しでも自分の

側が隙を見せれば、打ち取られるものと覚悟した。しかも、竜騎兵たちの持つ槍はみなそうなのだが、彼が持つ青緑に光る槍もまた、神官たちの使うものより柄がかなり長いのだ。

おそらく彼ら竜騎兵は、竜に乗って槍で獲物を仕留めるせいもあって、そのような長槍を使っているのだろうとルークは推測していたが、自分も数十名もの竜騎兵と渡りあうことで――切っ先に鋼の刃のついた槍の感触に、今では大分慣れてきつつあった。

（聖竜ルシアスよ！我に加護を与えたまえ！！）

ルークが心の中でそう呟き、槍を真っ直ぐに立て、そこに右手を十字にするよう交差した時のことだった（これが神官たちの、試合開始前の作法なのである）。ルークと交互に敵と渡りあってきたラミアスが、ぐいと弟子の肩を後ろへ引いて寄こしたのである。

「ルークよ、彼のことはわたしに任せろ」

ラミアスは四十代半ばの、司教の地位にある神官であり、神学に通じているのは当然のことながら、その温厚な性格とは似合わぬ、神業とさえいわれる槍の使い手であった。

「ですが、ラミアスさま。あなたがもしお倒れになったとあっては、もはや後がありません」

「ははは。言うてくれるな、ルークよ。まるでわたしが最初から負けるものと決めてかかっておるようではないか。わたしは、もしかしたら待っていたのかもしれない……彼のように強い槍の使い手が、自分の前に現れる瞬間をな。もし、わたしがこの男に敗れたとしても、こやつを恨むでないぞ、ルーク。これはわたし自身の望んだ、わたし自身の戦いなのだ」

「師匠……」

普段は開いているのかいないのかわからぬ、ラミアスの細い目から闘気のような凄まじい力が放たれているのを感じると、ルークは彼の後ろに身を引くしかなかった。

もちろんルークは自分の尊敬する槍術の師の勝利を疑ってはいなかった。ただ、敵が数において勝っていることを考えれば――自分

がひとりでも多くの竜騎兵を倒すのが望ましいであろうと、そのように計算していたのである。
銀髪に紫の瞳の男と、ラミアスの打ち合いは熾烈を極めた。おそらく、ほんの数分の間に、両者は五十数戟は槍の柄や穂を打ち戦わせたことだろう。
今では、後ろのほうにいた竜騎兵たちも、このふたりの打ち合いを何かに魅入られでもしたかのように、息を殺して見守っていた……さらに二十数分が過ぎ、ふたりが一旦距離を取って、呼吸を整えた次の瞬間に――すべては決まった。
ラミアスの鋼の穂が、銀髪の男の胸当てに届いたのである。だが、無常にもその瞬間、ラミアスの槍の切っ先は砕け散っていた。
「なんだと！？」
驚愕に目を見開いたまま、ラミアスは絶命した。紫の瞳の男の槍が、彼の腹部を刺し貫いたからである。
「ラミアスさまっ！！」
自分の師匠が勝ったとばかり思っていただけに、ルークの絶望はより深いものとなった。ラミアスの体を抱え起こした時、ルークの白の神官服は赤く血で汚れた……彼はラミアスが生前好んでいた聖句のひとつを呟くと、頬の涙をぬぐい、闘神の如き眼差しによって、銀髪の男のほうを睨みつけた。
「卑怯者めっ！！貴様の胸にラミアスさまの槍が届いた時点で勝負はついていたとは思わぬのか！？それを、それを、よくもこんな……っ！！」
「すまなかった、とは思う」
紫の不思議な色の瞳をした男は、弔いの言葉でも述べるように、静かに言った。
「だが俺も、卑怯者とならずにすむよう、これでも一応気は遣ったのだ。このことを俺はとても恥かしく思うし、自分の勝利であるとも決して思わない。一対一の同条件の勝負であったなら、もう一度手合わせしても俺は負けることになっただろう。ルークとやら、貴

公の師匠は本当に素晴らしい槍の使い手だった。それをむざむざ殺すことになり、俺も残念に思うが……これが戦争というものだと思い、諦めてもらう他はない」
「なんだとっ！？よくも貴様、そんなことが言えたものだなっ！！戦士の風上にもおけぬ、卑怯者のくせにっ！！」
ビュッと風を切って、ルークの槍が唸った。そしてその次の瞬間――何故この銀の髪の男が、「気を遣った」と言ったのか、その言葉の意味がルークにもわかったのである。何故といって、ほんの数戟槍の柄を打ち戦わせただけなのに、鉄の槍がなんの前触れもなしに真っ二つに折れたからだ。
「なに！？」
「だから、すまないと言ったんだ」
紫の瞳の男は、相も変わらず落ち着き払った顔の表情と声音で続けた。
「俺たちの使っている鎧冑は、竜の皮膚を何層にも厚くして作ったものだし、この槍は鉄や鋼よりも強い鉱物によって出来ている。俺も噂として伝え聞くだけだが、このジルコンドという名の青緑石は、中央世界のどこでも取れぬらしいな。俺も無用な殺生はこれ以上避けたい……神官のルークよ、どうか黙って我々に目の前を通り過ぎさせ、聖竜の槍を戴かせてほしい」
「……っ！！」
（無用な殺生は避けたいと言いながら、何故ラミアスさまのことは殺したっ！！）
そう叫びたい衝動にかられ、ルークは下唇を血が滲みそうなくらい、ギリと噛みしめた。そしてそのままの姿勢で後ろへ下がり、重い石の扉を後ろ手に開ける。
聖竜の槍は、持つ者を選ぶと言われていた。ゆえにこの時もルークは、憎しみに心を燃え立たせている今の自分が、その槍の使い手に選ばれるとは露ほども思いはしなかった。ただ、この目の前にいる銀の髪に紫の瞳をした男と、ほんの少しの間でいいから、同等の

力が欲しいと願ったのだ。勝負がつくまでの間だけでいい――涼しげな顔の表情の男に手傷を負わせることさえ出来れば、次の瞬間槍が重くなり、持ち上げられなくなっても構わないと思っていた。
「やはり、そう来るか」
壁にかかる松明の光の下、透明な水晶のケースに収められている槍を、ルークが手にする姿をファルークは見守った。浄めの水晶によって守られた聖竜の槍は、聖職にある者以外が触れようとすると、死の呪いがかかるという話であった。
ゆえに、このこともファルークの中ではある意味、計算の内にあったことなのである……師匠のラミアスを殺されれば、その怒りと復讐心から、ルークが聖竜の槍に手をだすであろう、ということは。
「聖竜の怒り、今こそ思い知れ！！この蛮族どもめっ！！」
ルークが聖竜の槍を両手に握りしめると、その黒い柄の部分に銀の神聖文字が一瞬浮かび上がった。
（これが、聖竜の槍……！！）
石室の中でふたりきりになると、ルークが容赦なく槍を振るってファルークに猛然と襲いかかってきた。先ほどとは比べものにならぬ、手に痺れるような衝撃が走り、ファルークは思わず、ジルコンドで出来た槍を取り落としそうになったほどである。
「うおおおッ！！」
獣のような唸り声を上げて飛びかかってくる神官を前に、ファルークはらしくもなく気圧された。というより、肝心の聖竜の槍と呼ばれる槍自体から――何か禍々しい力にも似たオーラが発散されており、ルークはまるで槍の持つ邪悪な力に操られてでもいるかのようだったのだ。
そのような相手に流石のファルークも長くは持ちこたえずず、二十数戟打ち合った末、今度は聖竜の黒い槍によって、ジルコンドの槍を真っ二つに折られていた。
「ファルーク、加勢するぞっ！！」
その時、仲間の竜騎兵であるアレクとラウル、それにカイルとシ

グマが助けに入ってくれなかったとしたら、おそらく自分は心臓か胴、あるいは頸部か頭部を刺し貫かれて死んでいたろうとファルークは思った。
だが、彼らから再びジルコンドで出来た槍を受けとると、手強い相手ながらもなんとかルークの手から聖竜の槍を引き離すことが出来たのである。
「やめろ、殺すなっ！！」
後の禍いを絶つためとわかっていたが、ルークの頸部にアレクが槍の穂を立てようとするのを、ファルークはすんでのところでやめさせた。
「彼はまだ幼い……おそらく、十六か七といったところだろう。それでいて我々とここまで渡りあったのだ。そのことと彼の聖竜の槍を守りたいという想いに敬意を表し、この宝物倉では血を流すべきではないと、俺は思う」
普段、あまり感情を表にださないファルークが、声を荒げてそう叫んだためであろう、アレクは「おまえがそう言うのなら」と言って、ルークの体から静かに手を離した。
ファルークは床に転がる聖竜の槍を拾いあげ、意外にも軽いことに驚いていた。アシュランスから聞いた話によれば、相応しくない者が触れると、十トンもの鉛でもあるかのように、到底持ち上げられない代物だと聞いていたのだが……。
そう思いつつ、ファルークが何気なくシグマに聖竜の槍を手渡すと、彼はその途端に床へ倒れ伏していた。
「ファルーク、悪ふざけはよせよっ！！」
「ああ、すまん」
怒ったように赤い顔をしたシグマにあやまり、ファルークは再び聖竜の槍を手中に収めた。
（そうか。槍が自分の主に足ると認めた人間でなければ、おそらくこの槍は持ち上げることすら叶わんということか）
石室を出る時、ファルークは神官の少年が蹲って涙を流し、体を

震わせている姿を最後に見た。冷たい石の床に両膝をつき、彼はまるで神に対して懺悔するように、何度も壁に額を打ちつけていた。
「ラミアスさま、許してくださいっ！！僕ではなく、最初からあなたが聖竜の槍の使い手になっていれば……っ！！」
その痛ましいすすり泣きと叫び声は、いつまでもファルークの胸の内にしこりのように残り続けた。神官などといっても、心正しい者ばかりというわけではないと、彼はそのようにアシュランスから聞いていたが――中にはルークのような＜本物の神官＞もおり、そのような神聖な者から宝とされるものを奪ったということが、ファルークの中では許されぬ罪のように思え、魂に消えない烙印を押されたようにさえ感じられていたのである。

ファルークと槍の打ち合いで負かされて以来、ルークはより一層槍の鍛錬に励むようになっていたが、ラミアスをはじめとする、自分より強い槍の師範がいない今……こんなことをして何になろうという虚しい思いが、彼のことを包みはじめていた。
自分よりもより強い相手と手合わせ出来なければ、あのファルークという男には絶対に勝てない――そう思うと、腸が煮えくり返るほどの悔しい気持ちがルークの身を焦がした。そのような相手を求めるために、正式な手続きを取って諸国行脚の旅に出るという許可が欲しいと思いもしたが、何分自分はまだ十七歳であり、旅僧となるためにはあと一年待たねばならぬ身でもあった。
もっとも、聖都のルシアス神殿が崩壊した今、そのようなことに拘る必要はもしかしたらないのかもしれない、とルークは思いもした。そう遠くない日、ルシアス神殿の本殿はルクシンドラへ移ることになるのだ……あの都では、姫巫女のいないルシア神殿と、聖竜の槍が眠っていないルシアス神殿とが、ただ形式ばかりの、魂のこもらない儀式を続けていくのだろう。そのくらいならいっそのこと、神官という職から身を辞し、ただの平民として生きていってもいい

のではないかとさえ、ルークは時々思うのだった。
　そうして復讐の鬼と化し、あのファルークという男を、それこそ＜地の崖て＞までも追いかけ、討ちとってやろうと……だが、そのように憎しみが己の心の内で増す時、ルークの心の中にはいつも、師匠ラミアスの優しげな微笑が思いだされるのであった。
『わたしは、もしかしたら待っていたのかもしれない……彼のように強い槍の使い手が自分の前に現れる瞬間を。もし、わたしがこの男に敗れたとしても、こやつを恨むでないぞ、ルーク。これはわたし自身の望んだ、わたし自身の戦いなのだ』
　だが、自分の故郷を汚されただけでなく、恩師や友が何人も死んだことを思うと、ルークはやはり、憎しみというものが持つ強い力に負けそうになることがしばしばだった。
　そして、思う。自分はあのファルークという男を仮に討ち果たせたとして、それだけで気が済むだろうか、と。おそらくは、その次にはアシュランスという＜地の崖て国＞の王の首が自分は欲しくなるだろう……それから、聖竜の槍が眠る石室で、自分のことを追いつめたアレクやラウルやカイル、シグマといった男たちも、全員打ち殺してやりたい……。
　ルークは、そのように自分が神官らしくない思いに満たされている時間が長いことに、愕然としていた。彼は僧侶として告解室の当番に当たると、平民たちが神殿の告解室へやって来て、色々な罪を懺悔する言葉を多く聞いていた。たとえば、今週自分は心の中で姦淫の罪を犯したであるとか、誰それの財布から少しばかりお金を盗んだとか、嫁や姑を憎む気持ちがどうしても心から離れないであるとか……ルークはそれらの悩みに対し、ある部分超然として事に当たっていたといっていい。
　何故なら彼には、卑しい動機で乙女のことを盗み見たことなどなかったし、金銭的な欠乏を経験したこともなければ、誰かを憎しみの限りを尽くして憎むといった感情も、一度として経験したことはなかったからだ。

けれど今、人々が何故そんなにも浮世の＜罪＞といったものから逃れられぬのかを、ルークはよくよく思い知っていた。聖都が焼け落ちてのち、州境にあるいくつかの町には難民のための集会所が設けられていたが、そこに集まった人々は実に肩身の狭い思いをしなくてはならなかったからである。それは生き逃れた神官たちも例外ではなく、「何故命を賭けても姫巫女さまや巫女さまたちを守らなかった」と声を限りに叫ばれ、天幕に石を投げられるということもしばしばであった。

そんな中、自分たちも極貧の最中にあるというのに、神官たちの食糧をまず真っ先に確保しようとする、美しい心根の婦人たちが何人もいて……聖職にある身ながら、神官たちの幾人かが彼女たちに心惹かれているのを、ルークは知っていた。そしてそのことを＜罪＞とするのが果たして正しいことなのかどうかすら、今の彼にはわからなくなっていたのである。

彼自身に関していえば、若い娘が自分に意味ありげな眼差しを投げてきても、今のところ心が動くということは特にない。ただし、これまでの有り余る食糧や物品に囲まれた生活から、一転して貧しさの底を知ってみて初めて――窮乏のために一片のパンを盗む罪人の気持ちというのは、痛いほどわかる気がしていた。それに、この世に存在する誰かのことを、憎しみの限りを尽くして憎むという気持ちのことも……。

ルークの心は今、迷いの最中にあった。自分はそうした難民となった聖都の生き残った人々とともに、再び聖都を復興することを夢見ているが、大神官のエルヤサフさまより直接お声がかかり、ルクシンドラで司祭の職につくよう言われてしまったからである。

もしそれを断ったらどうなるのか、ルークにはわからなかった。しかも、大神官であるエルヤサフより直々に、「ルクシンドラにある神殿の土台と屋台骨は腐っているが、そこをおまえのように真の信仰を持つ僧侶に変えてほしいのだよ」とまで言われてしまっては……ルークはいわゆる出世といったことにはまるで興味がなかった

が、ただ、人々の信仰をただすためだというのなら――辺境の国々へ奉公に出されたとしても、黙って従うくらいの気持ちがあったからである。

ルークはユニファの花の甘い香りと、夢のような白い花びらに囲まれながら、この時、ただひとりの少女のことだけを想っていた。七歳になるまでよく一緒に遊び、彼女にヒナギクの冠を被せて、忠誠を誓った日のことをルークは今もよく覚えている。

（まさか、それがいつか本当に実現するとはな）

ルークはエルヤサフの口から、姫巫女がご存命中であると聞き、魂を貫かれるほどの喜びに打ち震えた。神官たちの間でも噂にはなっていたが――それが絶対に本当であるという確信が、ルークにははっきりと持てないままだったのである。

「これはここだけの話として聞くのだぞ、ルーク」

エルヤサフは、王城の自分の居室で、小さな囁くような声で言った。

「どうやら第四の巫女であったミュシアが、姫巫女リリアより聖杯を受け継いだらしいのじゃ。もしも伝説が本当であるならば、姫巫女は再びこの地に立たれよう。じゃが、我らはその間ただ手をこまねいて待っているのではなく、再び姫巫女がこの地に降り立った時のため、その聖なる下地とも言うべきものを形作っておかねばならぬ。わしの言うてることの意味、当然わかっておろうの、ルークよ？」

ミュシアが生きているだけでなく、その上姫巫女として聖杯まで継承したと聞き……魂が喜びに溢れ返るあまり、エルヤサフがその後自分に何を言ったのかを、ルークはあまり覚えていないほどであった。

（ミュシアが生きている！！しかも、我々が守るべき聖杯とともに……！！）

今ではそのことが、ルークの生きる糧であり希望であり、喜びのすべてであった。彼は敬虔な神官であったから、聖書に書かれてい

ることとそこに記された伝説について、一言一句違わずすべて信じていた。そして何より、ルークにとってもっとも重要だったのが――ミュシアのことを想えば、憎しみを退けることの出来る自分がいることに、気づいたという点であったかもしれない。

（憎しみに身を焦がす者が、姫巫女の御身を守るのは相応しくない）

もちろん、そう思いはしても、ファルークという名の、銀髪に紫の瞳をした男に対する憎しみは消えなかったし、もし偶然にでももう一度出会えば、彼に槍の穂先を向けることにためらいを感じる理由はまるでない……だが、それと同時に憎しみの暗い沼のような場所でもがいていた自分に、ミュシアは何より一筋の光を与えてくれたのだ。

ルークはこの時、ユニファの甘い芳香に包まれながら、白い花咲く枝々の間に、宵の明星が瞬いているのを見た。そして、そこに何かの神からの啓示を見るような思いがしたものである。

（あれこそは、僕にとって唯一の希望の星。ミュシア、君が姫巫女としてこの地に戻ってくるその日まで、僕はその間一体何があろうとも、どんな恥辱をこの身に受けようとも、神官として生きることを今ここに誓おう）

そして、本当に＜その日＞がやって来るまで――ルークは幾多もの苦しみや悩みを受け、魂を極限まですり減らすような辛酸をなめることになるのであったが、そんな彼の苦労もまた、最後には報われることになるのである。

第2章　カーディル王立図書館

『おお、姫巫女よ！我は御身に神官としてこの身のすべてを捧げ奉る！！』

そう言って幼き日のルークが自分にヒナギク（デイジー）の白い花冠を授けてくれた時、不意にすぐ横で風が唸りを上げた。

この時本当は風などなく、空もとても良く晴れていたはずなのに――何故か突然、嵐がきそうな空模様となり、どこかで雷の鳴る音まで聴こえてきた。

『あっ、雨だ！！ミュシア、学院の裏庭にある木のうろにでも隠れてようよ！』

『うん、そうね』

ミュシアはせっかくの白い花冠が雨に打たれて痛むのが嫌だったので、それを両手に大切に隠し持つようにして野原を駆けていった。

『ほら、ミュシア、早くはやく！！』

『ルーク、待ってったら。わたしそんなに早く走れないもの！！』

不思議なことに、ルークは遠くにいけばいくほど、その背丈は大きくなり、やがて小さな子供ではなく少年の姿になっていった。そしてミュシアもまた、白いヒナギクの花をいつの間にやら取り落とし、ひとりの少女になっていたのである。

ふたりは、聖契学院の裏庭にある大きな樹の下までいくと、互いの首に手をかけあって、そっと不器用な抱擁をかわした。けれども雨はやむことなく降り続き、やがて何かの不気味な気配があたりを包みこみはじめていた。

そしてミュシアが、不意に枝々の間に目をやると――そこには、ひとつの大きな眼のようなものが、じっとこちらに視線を注いでいたのである……。

ミュシアはベッドからがばりと身を起こすと、「はあっ、はあっ」と荒い息をついた。
「今のは、夢……？」
軟らかい羽毛の詰まった枕や布団に手を伸ばしたあと、ミュシアはぶるっと体に震えを感じ、自分の両肩を抱くように腕を交差させた。
何故かはわからないけれど、最近、よくルークの夢を見る。それは彼の名前を騙っていることに対する罪悪感からかもしれないと、最初ミュシアは思っていた。けれど、夢を見たあとの感触があまりに生々しいことが多いので、最近ではもしかしたら彼が助けを求めているのではないかと、そんなふうに感じることが時々あった。
（あのあと、ルークはどうしたかしら。神官たちの多くは、州境の町で難民たちと貧しさをともにしていると、噂に伝え聞くけれど……彼も生きていたらきっと、そうした生活を選ぶはずだもの。もし彼に会いたいと思ったら、そうした難民たちの天幕を訪れるといいのかもしれない）
そしてミュシアは、絹の敷布の上に手をすべらせて、胸に罪悪感の釘を打ちこまれるような感覚を覚えていた。
（昔は、清潔なシーツやあたたかな布団の中で眠れることが、当たり前だと思っていたけれど、今は違う……わたしは本当はもっと……）
ミュシアが寝起きに色々なことを考えはじめていた時、不意にコンコンと寝室のドアがノックされた。
「ミュっシアちゃ～ん！！朝ごはんの用意が出来ましたけんど、そろそろ起きて来られませんかね？」
「は、はいっ。今いきますっ！！」
シンクノアのどこかおどけたような声にそう答え、ミュシアはひとつくしゃみをしてから、服を着替えはじめた。流石に第十三月ともなると、寒さが身に沁みてくる。ミュシアは鳥肌を立てながら急

いで寝間着からチュニックに着替え、暖かい隣の部屋へ足を踏み入れた。
　例の薄い桃色のドレスは、実をいうとミュシアはあれからあまり着ていない……シンクノアとセンルの心遣いを無駄にするようで、心苦しくもあったが、今自分は性別を偽って神官となっている身なのだ。そう思うと、男物のチュニックでも着て町の平民を装うくらいがちょうどいいのではないかと、ミュシアにはそう思えてならなかった。
「おはよう、ございます」
　ぺこりとお辞儀をして隣のセンルに挨拶し、ミュシアは絹張りのソファにそっと腰かけた。いつものとおりセンルからはなんの返事もなく、かわりにシンクノアが「おっはー！！」と、白い歯を光らせて手を振ってくれる。
「センル先生ったら、朝はいつも不機嫌っスよねえ。たぶん起きてから何か腹に入れてからでないと、重い口が動かないっていうタイプなんじゃないスか？ほら、そんなあなたには、こんなこんがり焼きたてベーコン！！」
　そう言ってシンクノアは、暖炉の上の金網で焼いた、ベーコンののったパンを陶磁器の上へ置いた。次に彼はフライパンの上でうまい具合に目玉焼きを作り――それをミュシアの白い皿の上へのせてくれる。
「いつもありがとうございます、シンクノア」
　ミュシアが礼儀正しくぺこりとお辞儀をすると、シンクは少し得意そうに笑い、ジャムの瓶をごろごろとテーブルの端から端へ移動させた。
「さて、いちごジャムにブルーベリージャムにマーマレード。どれでも好きなのをパンにつけて食べてくださいな、お嬢さん」
「はい。どうもありがとう」
　シンクノアは旅慣れているせいかどうか、女の自分よりも料理をするのが上手いとミュシアは常々感じていた。パンや肉などを軽く

炙ってパリッとしたものを毎朝食べさせてくれるし、ポテトパイやミートパイを作ったりするのも上手かった。
「まあ、金さえあってなんでも食材が手に入りさえすりゃあ、うまいものなんかいくらでも作れるぜ、オ・レ」というのは、ミュシアが彼の料理を褒めるたびに言う、決めゼリフのようなものである。
　そんな感じでミュシアは、この日の朝も、神さまに食前の祈りを捧げてから、パンとベーコンつきの目玉焼き、それに紅茶という朝食を終えた。そして彼女が「ごちそうさまでした」と言って、食器類の後片付けをしようとした時――不意にセンルが、ミュシアの腕をぐいと引き寄せて、その唇の端にあるものを拭った。
「あ、あの……センルさ……」
「ジャムがついてる。もちろん、これから顔を洗うつもりではあったんだろうがな。陶器の洗面器には、やかんのお湯を入れるといい。おまえはいつも、水瓶の中の水しか使わないようだから」
「はい……」
　ミュシアは部屋の片隅にいくと、陶器の洗面器に水瓶の水を入れ、そこに暖炉にかけてあったやかんのお湯を足してぬるめにした。それから顔を洗って、乾いた布で拭くと、使ったぬるま湯をバケツの中へ捨てた。こうした一度使った水は、ある程度溜まったところで、下の水捨て場まで捨てにいくのである（センルはそんなことはメイドを呼んでやらせろと言ったが、ミュシアはこうした生活にまつわる全般に関して、なるべく自分の手でするようにしていた）。
「じゃあわたし、食器を一度下まで下げてきますね」
　これもまた、センルに言わせれば「メイドにやらせるべき仕事」ということになるらしいのだが、ミュシアは下にあるホテルの調理場まで、一度使った食器を毎回下げることにしている。もっとも彼女はそうすることで、＜ロダールの間＞に泊まっている客はチップをケチっていると、使用人たちが噂しているのを知らなかったけれど。
「あ～あ。あんたさあ、あの子に対してどーいうつもりで接してる

わけ？」
　シンクノアは、暖炉の脇にある薪箱から、薪をひとつ取りだして火にくべると、若干呆れたような顔つきで、目の前にいる蒼の魔導士のことを見返した。
「どういうつもりというのは、どういう意味だ？」
「すっとぼけてんじゃねーよ！」と、シンクノアは小指を立てて紅茶を飲みながら言った。「まあ、あの子の口にジャムがついてて、それをぬぐったところまでは許す。けどさあ、なんでそれをあんたが何気にぺろっとなめる必要があるのかって俺は聞いてんの！変態じゃあるまいし、ミュシアのことを自分の所有物みたいに扱うのもやめろよ。見てるこっちのほうが恥かしいから！」
「私のどこが変態で、また何ゆえにおまえが恥かしがる必要がある？」
　センルが居直っているというわけでもなく、あくまでケロリとそう言ってのけるのを聞き、シンクはソファの背もたれに手をまわすと、天を仰いだ。
（やだねえ、まったく。こいつもまさか、無自覚の無意識ってやつかよ）
「俺が言いたいのはさ、あんたの態度はあの子に誤解を与えるってこと。センルがもし、あの子のことを巫女じゃなくさせて自分のものにする気持ちがあるっていうんなら、俺も何も言う気はない。けどさ、あんたはそうじゃないだろ？まあ、俺にもセンルの気持ちはわかんなくもないよ。娘とか孫とか妹とか、なんの利害も関係なく、ただ可愛い可愛いって愛せる対象がいるとしたら、俺も似たよーなことするかもしんない。けど、ここで一言はっきり言っておくぞ。あの子は自分で気づいてないながらも、センルのことが好きなわけ。そういう相手がいちいち色んな細かいことまで気づいて優しくしてくれたら――果てはどういうことになるか、あんたもちったあわかるだろ？それじゃなくてももう、三百年も生きてるおじいちゃんなんだし！」

「私がジジイなのは余計な世話といったところだが……シンクノア、おまえの言いたいことは大体わかった。以後、留意することにする。それでいいか？」
「あ、ああ……」
あまりにもあっさり自分の言い分が通ったことで、シンクノアは少し拍子抜けした。てっきりセンルがいつものとおり、理屈っぽい持論のようものを展開しはじめるだろうと思っていたのだ。
だが、センルがまるで「今はそれどころではない」というように、沈思黙考しはじめるのを見て――シンクノアはむしろ自分が余計なことを言ったように感じはじめていた。別の意味では、自分などより彼のほうがよほど、ミュシアのことを考えて行動していることが、シンクにはよくわかっていたから。
「よし、ミュシアが戻ってきたら、今日は三人で王立図書館へいくぞ。私がエリメレク殿と会っている間、おまえはミュシアと図書館の一階にいろ。彼との話が終わったら、他の階にもおまえたちを入れてもいいかどうか、エリメレク殿に聞いておくことにするから」
「マジっスか！？やっりー♪」と、シンクノアはあまり深い意味もなく喜んだ。
もちろん彼もまた、幼馴染みのアイリがさらわれた飛空艇の足跡について、王立図書館で何か掴めればという期待と目的があったのだが、そちらのほうは実はすでに解決済みであった。センルからカルディナル王国のブリンクである、エリメレクとどんなことを話したのかを聞いて――シンクノアにはすでに、調べることなどほとんどなくなっていたとさえ言えるかもしれない。
そのようなわけで、ミュシアが部屋へ戻ってくると、三人は貸し馬車屋で馬を借り、王立図書館へ急ぐことにした。時刻は第十（ルゼル）の刻と第十一（ハザル）の刻の中間くらいの頃合であった。
センルは、糸杉に挟まれた小径をディアトレドという名の白い馬

に乗っていき、その後ろをシンクノアとミュシアの騎乗した鹿毛が追うような形で道を進んでいった。
「ミュシアのことは、おまえが乗せろ。私は少し、考えることがあるのでな」
貸し馬車屋で証文にサインしながら、センルが何気なく言った言葉に対し、ミュシアが若干傷ついたような顔をしたことに、シンクは気づかないわけにはいかなかった。
もっとも彼女が、自分と一緒に騎乗するのが嫌だとか、センルと同じ白馬に乗りたいと内心思っているのだとは、シンクノアも感じない。ただ、この時のセンルにはどこか――ミュシアに対して突き放すような距離感があったのである。
ある時は、口の端にジャムがついていると言って指でぬぐってくれ、かつそれをぺろりとなめるにも関わらず、ある瞬間には冷たく自分本位に突き放してくる男……（あ～あ。もしかして俺、逆効果なことをセンルに言っちまったのかもしんないなあ）と、シンクノアは溜息とともに後悔した。
センルにしても、考えごとがあるというのはおそらく本当のことなのだろう。というのも、半月ほど前にカルディナル王国のブリンクであるエリメレクと会見して以来――この蒼の魔導士の様子は、自分でも言っていたとおりかなりおかしかったからである。口の中で時々、呪文のような言葉をブツブツ呟いていたかと思えば、突然「よし、わかったぞ！」と胸の前で手を打ち合わせたり……また、シンクノアとミュシアが互いに何かを話している会話をまったく聞いておらず、上の空でぼんやりしているということも多かった。
ミュシアにしてみれば、何故センルがそんな様子なのかというのも、よくわかっていたに違いない。シンクノアにしても、あれから彼がエリメレクとどんなことを引き続き話しあい続けたのか、そのすべてについては聞いていないにせよ――絶対的な信頼感をもって、センルがミュシアに不利になるような取引だけはしないということ、また彼が彼女のことを思えばこそ、こうして色々考えたり行動した

りしているのだということが、よくわかっていたのである。
（もし、自分の好きな相手が、恋愛感情からじゃなかったとしても、そこまで色んなことに気を配ってくれたとしたら……俺だったら、どんな気持ちになるもんかな？）
シンクノアは、ミュシアの腕の横から手綱を持ったままの姿勢で、彼女の頭の上にちょこんと顎をのせた。シンクはセンルほどではないにしても背が高く、小柄なミュシアとは頭一個分以上身長差があったからである。
「どうしたんですか、シンクノア。さっきも溜息を着いたりしていたし……」
センルが湖のほとりに沿った道でなく、途中で枝分かれして森のほうへ続いている小径のほうへ入っていくのを見て――その分かれ道のところに標識があり、『↑言霊の森』・『王立魔術院↓』と書かれた札が立っていた――シンクノアはミュシアのハーブの香りのする頭から顎を外すと、小首を傾げた。
（王立図書館ってのは、王立魔術院に付属してるって言わなかったっけ？）
「ま、一見ノーテンキそうに見える俺にも、時には色々考えることがあるってことさ。たとえば、俺がいつも背中に背負ってる剣のこととか」
「そういえば、シンクの持ってるのが、もしかしたら本当に聖竜の剣かもしれないって、センルさんが……」
「そ。んで、センルの自説によれば、物事ってのは実はとーってもシンプルで、一番大切なのは聖書に書かれていることをそのまま信じることかもしれないってことなんだよな。つまり、前回の――といっても、今から千年以上も前になるわけだけど――＜聖竜の秘宝＞探索行では、聖杯を守る姫巫女と聖竜の剣の持ち主とが最初に出会っているわけだ。そんで、それより前の二千年くらい前にも＜聖竜の秘宝＞は使われていて、この時には空から禍いの星っていうのが落ちてきて、後代に書物として残るような形では歴史がきちんと

書き記されなかった。前に行った場所に「滅びの谷レドム」っていうところがあったろ？俺も隕石の遺跡なんかをあそこで見たりしたけど、あちこちの町や村が隕石でやられて、一旦人間の歴史っていうのはあそこで閉ざされたってわけだ」

「でも、それでもやっぱり人間は生き残って……人々にとって最後の希望である＜聖竜の秘宝＞を使うことにより、僅かながら生き残った人たちが再び土地に鍬や鋤を入れ、種を播き植物を育てていくことで、不毛の大地を復活させたのだと聞いています。それで、今現存している正訳聖書には、最初の創世神話から聖竜ルシアスと暗黒竜の戦い、それから光の神ルシアスの竜としての力が七つの秘宝に分化してのち――それが千年の時を経て、使われた時の過程が描かれているんです。これは一種の＜型＞のようなもので、次にもし＜聖竜の秘宝＞が使われる時の参考になるようにとの、先人の教えでもあると言われています」

ミュシアは、聖書であるとか神のことを語る時、一種独特の神聖な顔つきをすることがあり、そういう時シンクノアは、彼女がやはり（姫巫女さまなんだなあ）とぼんやり感じたりする。だが、それ以外の時にはただの十六歳の女の子であり、ハーフエルフの魔導士の一挙手一投足に一喜一憂するのを見るたびに……なんとなく、胸が切なくなるものを感じてしまうのだ。

「んで、その時にもさ、聖竜の剣の持ち主っていうのが、探索行の過程で聖杯の持ち主である姫巫女さまに最初に出会ってるっていうわけだ。けど、今から千年前にあったといわれる探索行と、三千年以上昔にあった探索行を比べてみると――その後の過程っていうのは、全然違っちまってるってことがわかる。姫巫女さまが聖竜の剣の持ち主に出会ったあと、千年前の伝説じゃあ盾の持ち主に会うってことになってるけど、三千年前バージョンでは、鎧の持ち主ってことになってるからな。しかも代々の秘宝の継承者っていうのが、王子のこともあれば、魔法使いであることもあり、ただの鍛冶屋の息子だったりと……まあ、確かに「参考」にはなるにしても、まっ

たく同じ運命が繰り返されるっていうわけじゃない以上、なんとも言えんものがあるわなあ」
「でもわたし――シンクノアの持ってる剣がもし、聖竜の剣だったとしたら、すごく嬉しいんです。そしたら、これからもずっと一緒に旅を続けていけると思うし……センルさんも、聖杯の持ち主である巫女が剣の保持者と最初に出会うのは、彼がその剣によって姫巫女の身を守るためじゃないかって言ってらしたし」
「んー、まあなあ……」
そう言って、シンクノアはぼりぼりと頭をかいた。何故といって、どちらの探索行の過程にも、その剣の保持者がいつまでも鞘から剣を抜けなかったなどという間抜けな記述は出てこないからだ。
「俺もさ、ミュシアやセンルと、いつまでもずっとこうして旅をしていたいよ。いつまでもっていうのは、お互いの旅の目的を果たすまではっていう意味だけどさ。けど、俺は自分が聖竜の剣の継承者だなんていうふうには、あんまり思えないんだなあ。つーより、この世界のどっかにこの剣を扱うのに相応しい戦士さんがいて、そいつにこれを渡すためのただの運び屋なんじゃないかっていう気がする」
「そんなことはありません」ミュシアは妙にきっぱりとした態度で言った。「シンクは素晴らしい剣の使い手なんですから……えっと、その剣を渡してくれたっていうリキエルさんっていう方もおっしゃってたんでしょう？時が来れば必ず抜けるって。だったら、今はまだその＜時＞ではないっていう、それだけのことなんだと思います」
「そうだといいんだけどなあ」
シンクノアは今度はどこか嬉しげな溜息を着いて、再びミュシアの頭の上に顎をのせた。（この、可愛らしくしていじましいお嬢さんめ！）と、シンクノアはよくそんなふうに感じる。それでいて、自分もミュシアも互いに相手を異性として強く意識するようなことはほとんどない。前回の千年前の探索行でも、三千年以上昔の探索行でも――美しい姫巫女を巡って、聖竜の秘宝の継承者たちが揉め

る場面というのがあるのだが、もし仮に自分が聖竜の剣の正式な継承者だとしたら、その点はおそらく問題ないだろうと、シンクノアはそう思っていた。
（けどまあ、そのかわり問題になるのが……）
シンクノアは前方をゆくハーフエルフの魔導士のことを眺めやった。彼は昼間であるにも関わらず、樹木が深く枝々を差し交わしているがゆえに――薄暗い通り路となっている場所の前で、白馬のディアトレドを一旦静止させていた。
「途中にある標識でも見たろうが、ここが＜言霊の森＞だ」
シンクとミュシアが追いつくのを待って、センルはそう口を開いた。
「城下町カーディルの住民であれば、この森の長い通り路の中で言葉は発さぬほうが賢明であると誰もが知っている。とはいえ、何故そうなのかというのは諸説あってな、この場所で神や精霊を汚す言葉を吐いたものは永遠の闇に閉じこめられるとか、出口に辿り着いた時にそこは他の世界の別な場所であるとか、色々言われている。だがまあ、私が二百年ほど前にこのあたりを何十回となく通ってみた限りにおいては――この森はそう危険でないと言っていいと思う。なんにしても一応、余計な言葉は発さぬようにしたほうがいいということだな」
「ふう～ん。でも、＜言霊の森＞っていうからには、何かいわくがあるんだろ？」
そうすると、センルが若干イライラするとわかっているので、シンクノアはミュシアの髪の匂いをかぐような仕種をしながら言った。
「……そうだな。魔法使いにとっては多少関係のあることかもしれん。この森の中で魔法の呪文を唱えると、それはそのまま本人に向かって返ってくるという話だ。だが、本当かどうかはわからん。何しろ、魔術院創設以来ずっとそう言われ続けているにも関わらず、誰もそれを試したことなどないのだからな」
（ほ～ら。今、眉のほうがピクっと動きましたぜ、センルの旦那）

と、シンクノアは少しだけ意地悪く思った。（本当はミュシアのことを、自分のものだけにしておきたいと思ってるくせに……あらためて聞くと「それはおまえの勘違いだ」とかなんとか言うんだからな。ミュシアはミュシアで、「自分のセンルさんに対する気持ちは恋っていうのとは違うんですっ！」とか大慌てで力説するし。それを焦れったい気持ちで見てなきゃなんない、俺の身にも少しはなれってんだ）

「でも、神さまや精霊を汚す以外の、ごく普通の日常会話なら、しゃべっても何も問題ないんですよね？」

「そうだな。まあ、普通に歩いていけば何も問題はない。薄暗くて長い道だから、一体いつ終わるのかと思うかもしれないが……この＜言霊の森＞を抜けると、＜緑樹園＞という場所が左手に見えてくる。ここでは硝子張りの温室で、魔導院の生徒たちが果物や野菜を栽培していてな、色々な作物を魔法の力で年中収穫することが出来るというわけだ」

「ああ、それでか！」と、シンクノアは妙に合点がいったように手を鳴らした。「城下町のホテルとか料亭とかさ、今時期じゃあ普通取れない野菜や果物がよく出てくるな～って思ってたんだ。なーるほど、そういうことか」

腕組みをして、妙にうんうん頷いているシンクノアのことは無視し、センルはディアトレドを道の先へ進めた。＜言霊の森＞のトンネルのような通り路は、今まで通ってきた小径よりも広く、馬が二頭並んで歩けるくらいの幅があった。

「そして、＜緑樹園＞の先に、魔術院に通う生徒たちの寮があるんだ。王立図書館があるのは、その手前ということになるな。寮と同じ灰色の石造りで出来ていて、魔術院と同じく見た目と中の広さがまったく違う」

「見た目と中の広さが違うって、ようするに魔法使いの使う幻術か何かによってってことか？」

ほとんど陽が差さないくらい、天井を枝々がアーチのように差し

かわしているのを見上げながら、どこか間抜け面をしてシンクが聞いた。
「そうとも言えるだろうし、そうでないとも言えるな。なんにしても、行けばわかるさ」
「……」
ミュシアは、センルやシンクの声が森のどこか高い場所に吸いとられるように消えるの聴いて、何故だか少し怖くなった。不意に、今朝見た夢のこと――ふと見上げた樹の枝の間に、巨大な眼が見えた光景を思いだし、ぞっと体が震えた。
「どうした、寒いのか？」
ミュシアはチュニックの上から、茶色い革のコートを着ていた。以前、センルがそろそろ寒くなるから毛皮のコートを買ってやろうと言った時、彼女はその値段の高さに驚き、それよりも安い革のコートを選んでいたのだった。
「いえ、寒いわけじゃなくて……ちょっと、今朝見た夢のことを思いだしてしまって。気にしないでください。すみません」
「私やシンクノアにあやまる必要はないと思うが」センルは何故かおかしそうに笑って言った。「どんな夢だったのか、よければ話してみるといい。怖い夢は、誰か人に話してしまうとその効力が薄れるというからな」
「そうなんですけど……」
ミュシアは突然、喉に何かが詰まったように言葉を発するのが難しくなった。＜言霊の森＞に宿る何かの精霊的な力が働いてそうなったというのではなく――彼女はただ、なんとなく怖かったのだ。あの巨大な眼のことを口にだして話したら、本当にそれが今目の前に現れるのではないかと感じられる、そのことが。
「あの、今この場所で話していいような夢じゃないんです。夢の中に魔物のような存在が現れて……その、だから……」
「そうだなあ。まあ、確かに」ミュシアの後ろでシンクノアが言った。「言葉ってのは大切だ。いつ・どこで・誰に・何を話すか、そ

れで人生の大半が決まるといっても過言じゃないとかって、俺の剣のお師匠さんも言ってたぜ」
「そういえば、その剣の師匠のリキエルという男が、おまえに＜不殺の剣アスタリオン＞とやらを授けてくれたのだったな。彼が一体何者で、今どこでどうしてるのかは、シンクノアにはまったくわからんのか？」
「わからんなあ。つーか、俺も旅先のどこかでリキエルに会えたらとはずっと思ってるんだ。どうもさ、俺がこうも不幸続きなのって、何も赤い瞳のせいばかりじゃないって気がして仕方なくってさ。どうもこの、抜けもしない剣のほうが禍いを呼んでるんじゃないかっていう気のすることが俺には時々あって……一度なんか、肥溜めにでも捨て置いてやろうかとさえ思ったこともあったけど、やっぱりそれも出来なくってなあ」
「シンク、それですよ！」と、ミュシアが突然後ろのシンクのことを振り返った。「あの、わたしも自分の体の中にあるっていう聖杯を直接目で見たっていうわけじゃないんですけど……感覚としては同じなんです。何かこう、邪な思いというか、良くない思いに自分が傾きそうになると、それを見透かされているような、何か聖杯自体に試されているような気のすることが、時々あるんです」
ここでセンルとシンクノアがほとんど同時に、「あっはっはっ！！」と笑いだすのを見て、ミュシアは一瞬唖然とした。
「聞いたか、センル。邪な思いだって」
「ああ、ミュシアのいう良くない思いなんていうのは、せいぜいが鳥が転んで怪我をしたのを助けなかったとか、その程度のことをいうんだろうよ」
「あるいは、飛び下り自殺したい鳥が、どうしても死ねないと悩んでいるのを助けなかったとかな」
「それとも、蟻が捻挫してるのに、包帯も当てなかったとか」
「そうそう。蜘蛛が腸捻転を起こしてるのに、自分は気づきもしなかったとか」

センルとシンクノアが他にも色々な事例を一通り引くと、ふたりはほとんど同時に、またも大笑いしていた。
「ひどいです、センルさんもシンクノアもっ！！」
ミュシアは珍しく、顔を真っ赤にして、怒ったように言った。
「わたしは真剣に悩んでるのに……あの、さっきの夢の話なんですけど、最近、よく夢の中でわたしがその名前を騙っている、ルークが出てくるものですから、最初は彼の名前を騙っている罪悪感が、そういう夢を見せるのかなって思ってたんです。でも、最近ではなんだか彼に、夢の中で呼ばれてるような気がして仕方なくて……もし彼がどこかで困っているのだとしたら、何を置いても助けなくちゃって、そう思うんですけど……」
長いトンネルのような、緑と灰色の世界が終わり、三人は再び、初冬の明るい陽射しの元へ出た。正確には、ヤースヤナ・ホテルを出た時には空は薄曇りで、雪でも降りそうに感じられていたのだが、今は雲間から明るい太陽が燦然と輝く顔を出している。
ミュシアは振り返って、不思議な森の暗がりを間違いなく後にしたことを確かめると、センルに促されたとおり、夢の内容を語りだすことにした。
「えっと、その……ルークっていうのは、七歳になるまで一緒に育った仲のいい子なんです。七歳を過ぎると、女子と男子は寮が別々になってしまうので、そのあとはほんの時々どこかで姿を見かけるくらいで、言葉を交わしたこともありません。でも、彼が聖契学院をトップの成績で卒業したことは聞いていましたし、そのあとも――わたしが巫女見習いになってから、ルークが＜棒術演舞＞で槍の腕前を披露する姿などは見ていました。だから、もし彼が生き延びているなら、今ごろ州境にある難民の天幕にでもいるんじゃないかなって思うんです。それに、彼に会えばもしかしたら……あの時聖都で何があったのかを、より詳しく知ることも出来るんじゃないかって思ってて……」
ミュシアは、自分が本当に話したいのはそういうことではないと、

内心で感じていた。そうではなくて、樹の枝の間から見えていたひとつ眼の化物について、彼女はセンルに聞いてほしくて仕方なかった。けれど、その前にルークと抱擁を交わしていたということが――彼女の喉を詰まらせていた。

「確かに、おまえの言うことは一度よく考えてみる必要があるな。ルシアス王国の音に聞こえし聖都がルクシンドラへ移るのだとしたら……これから神殿制度はどう変わっていくのか。ユージェニー女王とレグナ大公の目的は十二大公のそれぞれから神殿税を怠りなく徴収することだろうから、それぞれの州より大公殿は今度はルクシンドラに向けて都上りをするということになるだろう。だが、彼らは姫巫女の御託宣あればこそ、今までずっと王家に忠誠を尽くしてきたのだろうから、姫巫女なき今、形式的にでも税を納めようとするものかどうか……」

まるで独り言を呟くようにセンルがそうした政治的な話をするのを、これまでミュシアとシンクノアは何度となく聞いていた。

ユージェニー女王と以前姫巫女であられたルルドさまは仲がお悪いというように、ミュシアは一度耳にしたことがある。それというのも、ルルドさまが誰も知らない女王陛下の隠された秘密を暴いたのが原因なのだという。もちろん、噂にすぎないことなので、事の真偽についてはミュシアもはっきりとはわからないのだが。

「そういえばミュシア」

センルは自分がまた深い物思いの世界に入りかけているのに気づき、ハッとしたように彼女のほうを振り返った。

「おまえ、夢の中に魔物が出てきたとか言っていたろう。まさかとは思うが、おまえが名を騙っているルークが、突然魔物に変わって襲いかかってきたというわけではあるまい？」

（センル先生……）シンクノアはここで、笑いたくなるのを必死に堪えねばならなかった。（それじゃあまるで、娘に恋人の存在を聞かされた父親とまったく同じ態度ですぜ）

「えっと、その魔物っていうのは、大きなひとつ眼の気味の悪いの

なんです。これまでにも何度か似たような夢を見たことがある気がするんですけど、何故かそのたびに夢の内容を忘れてしまってて……」

ここまで聞くと、センルもシンクノアも流石に、表情から笑いを消し、互いに顔を見合わせるということになった。

「もしかしてそれって、センルが言ってたヴァーリなんとかってやつか？」

「確かにミュシア、そいつのことは＜言霊の森＞では言わなくて正解だったな」

道の左手には、まるで鏡を嵌めたような硝子の温室がずらりと並び、遠くの王立図書館の近くまで続いていた。右手には、魔術院の敷地とそこを囲む高い塀が聳え、そちらから鐘楼の音が響いてきた――第十一（ハザル）の刻を知らせる鐘の音である。

「ヴァリアントのことは、一応以前エリメレク殿に話しておいた。それらしきものに襲われたと思うが、次に奴と出会った時にどうすればよいかとお聞きしたら、『何もせぬがよい』と言われたよ。奴と戦って勝てる者はこの世に存在しないと言われているそうだ。つまり、対峙して私が奴に何か魔法を唱えたとするな。そうすると、それと同等の力が常に跳ね返ってくるということになるらしい……ヴァリアントというのは、そういう存在なのだそうだ。もっとも、エリメレク殿も、彼の信頼する＜円卓の魔導士＞と呼ばれる方々も――これまで、ヴァリアントという存在と直接会ったことはないという。問題はまあ、何故そのようなものがミュシアのことをつけ狙っているのかということだが……」

「あの、わたし、センルさんの言われていることがよく……」

シンクノアはあの時、狸寝入りをしていたのであったが、相手から凄まじいまでの妖力を感じとっていた。だが、今のセンルの理屈でいうとしたら、その妖力というのは、センルが同等の魔力を持っているということではないのかと理解した。それであればこそ、彼はおちおち眠れもせずに、一晩中起きているというはめになったの

だろう。
「そっか、あの時ミュシアちゃんはぐっすり眠ってたもんな。けど、考えようによっちゃあ、その時もひとつ眼の大目玉さんは、もしかしたらこっそりミュシアの夢の中に現れていたのかもしれないぜ？こいつは俺の勝手な想像なんだが、奴は聖杯とは逆の、何か邪悪な力を持つ存在なんじゃないかな。千年前の探索行も、三千年以上昔の秘宝探索行も――そうやって何かの闇の力、邪悪な力に妨害されたと聖書に書いてあるからな。たとえば、あいつらはそれぞれの秘宝の継承者たちが心を堕落するような隙を常に狙ってるっていうし、千年前の探索行じゃあ鎧の継承者が仲間を裏切って向こうに寝返っている。俺はこうした話を、ただの大昔にあった物語的なもんだと思って聞いてたんだが、案外本当にそのとおりなのかもしれないな……そのヴァーリなんとかってのは、おそらくミュシアの心になんの汚れも落ち度も見出せないもんで、今はまだ手出しが出来ないのかもしれない。けど、じっと見張って自分の出番がどこかにありはしないかと、隙を窺ってるんじゃないのか？」
「シンクノア、そんな怖いこというの、やめてくださいっ！！」
ミュシアが再びぞっと怖気立ったように、自分の体を抱くのを見て――「悪い、悪い」とシンクノアは素直にあやまった。もしシンクノア自身がそのヴァリアントという存在と向きあった場合、相手を斬った剣のダメージはすべて自分に跳ね返ってくるのだろうかと、シンクは一瞬想像してみた。そしてそれと同時に、一縷の望みを背中のアスタリオンという剣に感じてもいたのである。
（もしこれが本当に聖竜の剣で、俺にこの剣を鞘から抜くことさえ出来たら……ミュシアのことを守ってやれるのにな）
シンクノアはふと、隣の馬上の魔導士が近づいてくるのに気がついた。彼が時々見せる真剣な眼差しを見て、シンクはセンルが自分とまったく同じことを考えているのだと感じとった。
「おまえのことは、必ず私が守ってやる。仮に世界中のすべてを敵にまわしたとしてもな。ヴァリアントというのは、神ではないにし

ても、神に似たような存在で、自分では直接手をださずにただ＜見ている＞だけの邪悪な生命体なのだとも聞く。奴はおそらく、今回千年ぶりになる聖竜の秘宝探索行がはじまったのを知って――その行く末がどうなるのかを見てみたいというだけなのかもしれん。まあ、もしまたおかしな夢を見たら私に知らせろ。それがもしかしたら何かの前触れを知らせる予知夢である可能性もあるからな」

「はい、センルさん……」

ミュシアがそう一言呟くように言ってから、顔を俯ける様子を見て、シンクノアは（やれやれ）と再び溜息を着きたくなった。

（『世界中のすべてを敵にまわしても、おまえのことは私が守ってやる』か。もしこれで俺にミュシアに対して仄かな恋心なんつーのがあったら、この時点で確かに喧嘩になってるわなあ。残りの盾とか鎧なんかの継承者がどんな奴なのかはわからないにしても……そいつがどっかの国の騎士さまで、姫巫女に我が身のすべてを捧げ奉る！！なんて言いだしたら、センル先生、顔が青紫どころか青黒くなるんじゃねーの）

シンクノアは自分でも少し不謹慎だとは思ったが、ヴァリアントという存在が秘宝探索行の行程のすべてを見張っていたい気持ちが、なんとなくわかるような気もしていた。何しろ、千年ぶりに人間世界の歴史が大きく変わろうとしているのだ――これほど面白い見物は、おそろしく長命であろう魔物にとって、見逃すことの出来ない一種のショーのようなものなのではないだろうか？

（俺にしたところで、センルが最後ミュシアのことをどーすんのかとか、気になるもんなあ。三千年前の探索行の終わりじゃあ、竜使いの冑の継承者が、姫巫女と愛しあっていながらも別れたってことになってるし……彼は引き続き＜地の崖て国＞を治め、姫巫女殿はルシア神殿へ戻って国を再興したというわけだ）

少し手前をゆくセンルの乗る白馬のあとを追いながら、シンクノアはミュシアが今何を思っているだろうと想像してみた。自分の好きな異性に『すべてを敵にまわしても、おまえのことを守ってやる』

だなんて言われたら、年頃の乙女としてこれ以上嬉しいことはないような気がする……けれど、シンクノアの位置からでは、ミュシアの顔の表情ははっきりと窺うことが出来なかった。ゆえに、彼にはミュシアの本心がわからぬまま終わってしまった。

王立図書館の前に二頭の馬が到着した時、ミュシアはもう顔を俯けてはおらず、ルークとして神官を演じている時と同じ、どこか凛とした真っ直ぐな表情が、そこには浮かんでいるだけだったからである。

カーディル王立図書館は、センルが先に言っていたとおり、見た目と中の広さがまるで違っていた。図書館も、その先にある魔導生たちの寄宿舎だという塔のついた城も――どっしりとした石造りで出来ているのだが、中に入るとがらりと印象が変わった。

図書館の内部は全十階層からなる吹き抜けで、オレンジとも茶色ともつかない、美しい木材によってそれぞれの階段や書架などが構成されている。にも関わらず、外から見る限りにおいて、この図書館は二階建てのまったく不思議なところのない建物であるようにしか見えなかった。

センルは、一階にある広いエントランスの脇、アカシヤ材で出来たカウンターのところにいる、魔導司書のひとりに声をかけた。彼女は第9級（クワイル）の位を持つ魔術院の卒業生である。

「蒼の魔導士のセンルさまですね。ブリンクのエリメレクさまより、お話のほうは窺っております。お連れの方に館内を案内して差し上げればよろしかったでしょうか？」

「ああ、頼む」と、センルは魔導司書のアリッサがどこか媚びた視線を送ってきても、まったく気づかなげに彼女に返事をした。「私はこれから公邸のほうで、エリメレク殿と少し話すことがあるので……その後、彼の許可を受けてから、二階から上へは私が直接案内したいと思う」

「そうですね。わたしはクワイル（黄緑）の魔導司書ですので、閲覧できる図書は当然、三階にある書物までですから。四階にはリディル（第８級・橙）の魔導司書が、五階にはナディーン（第７級・紫）の魔導司書がそれぞれいますけど、彼らというのは、なんといいますか、こう……」
「いや、わかっている」
　センルは微笑を堪えきれずに笑った。
「昔も彼らは、非常に気難しい顔をしておったよ。もちろん今では司書も変わっていようが、図書館内は吹き抜けになっているから、一階に騒々しい市民でも現れようものなら、彼らは沈黙魔法をよく使っていたものだ。それに魔導司書というのは、魔法の心得のない者を一階に入れることさえ反対していたからな。本を開けることの出来る魔石がなければ、閲覧は不可能であるにも関わらずそうだったのだ。そんな魔導士連中に一般市民を案内しろなどとは、とても頼めたことではない」
「御理解、痛み入ります」
　若い魔導司書の女性が、センルの微笑みに顔を赤らめるのを見て、ミュシアは何故か胸の奥がちくりと痛むものを感じた。
（何かしら、これ……）
　生まれてから一度も、色恋に関することで嫉妬を覚えたことのないミュシアは、その感情がどこからくるものなのかを知らなかった。ただ、それがあまり良くない負の感情であることはわかっていたので――エントランスの縁を飾るようにして並ぶ、薬草や香草などを見てまわることにした。
「その白いのは、ユーニップの花だな。根を煎じると、熱冷ましによく効くんだ。んで、向こうのがアルミラ草。こいつにはよく世話になったぜ。俺の剣のお師匠さんってのがまあ、血も涙もない鬼でさあ。俺の目がなまじいいもんで、目隠しさせた上、気配だけを探って自分にかかってこいとか無茶をいうわけ。当然こってんぱんにのされちまって、このアルミラ草で作った湿布薬をアイリによく貼

ってもらったもんだったよ」
「それで、なんですね」ミュシアは微笑みながら、毒がありそうにさえ見える、赤紫のアルミラ草を見て言った。「わたしには武術の心得なんてありませんけど、シンクの剣の腕前が相当なものだというのはわかりますから……わたし、シンクやセンルさんに出会った翌日、自分の身は自分で守れるから、用心棒なんて必要ないみたいに言ったことがあったでしょう？もちろん、あれは嘘なんです。わたしが名前を騙ってるルークって、槍術の師範代だったものですから、つい彼になりきったつもりで、そんなことを言ってしまって……あの、シンクノア。もし良かったらこれから、時間のある時にでも、わたしに剣術を教えてはくれませんか？」
「ええっ！？」
驚いたシンクノアの声が、あまりに大きかったためだろう、入口に近い書架にいた数名の平民と、階段の踊り場にいた魔導士などが、一瞬こちらを振り返った。三階のほうでも、階段近くの座席で本を読んでいた魔導士が、沈黙魔法の呪文を唱え、最後に印を切っている姿が見える……センルは、シンクノアの驚きの声を合図とするようにこちらへ戻って来、彼らに「どうした？」と声をかけた。
「いやまあ、こっちの話」
センルには気づかれぬよう、シンクノアはミュシアに左目でウィンクしてみせた。
「それより、知的美人司書との密談は終わったんスか、センル先生？」
「……何やら、意味ありげな言い方だな。まあ、そんなくだらんことはどうでもいいとして、おまえとミュシアは彼女に案内してもらって、図書館の一階で『ある魔法使いの偉大な一生』といった伝記でも読んでいろ。あるいは、世界中の民話を集めた本とか、神話関係の本などだな。私はエリメレク殿との会見を終えたら、再びこちらへ戻ってくる。昼ごはんのほうは、図書館の二階に寮へ通じる通路があるから、そこにある食堂まで案内してもらって、何か食べて

くるといい」
「あの、センルさんは……？」
ミュシアがいつものように気遣わしげな眼差しで見上げるのを見て、センルは微かに笑った。
「魔法使いというのは、昼飯くらい抜いても、どうということもないものだ。まあ、私のことは気にせず、魔法寮の名物である孔雀料理でも食べてくるといい。魔術の触媒として、孔雀の羽根をよく使うんだが、そのせいもあって孔雀肉をうまく調理する方法を昔、とある魔導調理士が考えだしたというわけだ。あと、孔雀の卵料理なんていうのもあるから、珍味と思って御馳走になってくるといい」
この時ミュシアが、センルにはわからない不思議な影を顔の表情に走らせても――彼にはそれがなんなのかまでは掴めなかった。シンクノアもまったく気づいてなかったが、センルは特に気にするでもなく、そのまま中央にある階段を上っていく。
「あれ、センル先生？エリメレクどんの公邸っていうのは、魔術院の校舎のほうにあるんじゃなかったっけ？」
「ああ。魔導教員たちの宿舎も、向こうにある。だが、やんちゃな魔導生たちを教師たちがそのまま放っておくはずもなかろう？向こうとこっちはきちんと、空間転移魔法陣によって結ばれているのさ。だから私はそれを使ってエリメレク殿の公邸――別名魔導邸へ行こうと思っている」
「な～る。そーゆーこと。そんじゃ、一発がんばってきてくださいや、センル先生！」
そう言ってシンクノアは、階段を上っていくセンルの背中を、手を振りながら見送った。
「さて、と。ミュシアちゃんってばなんで急に、剣なんて振るいたいと思ったわけ？まさかとは思うけど、俺やセンルのお荷物になりたくないとか、そんなことを思ってるんじゃないよな？」
「それも、あります。実際わたしは、これといってなんの取り柄もないですし……たとえば仮に、何かの形で人質にでも取られたらと

したら、シンクやセンルさんに迷惑をかけることになるかもわかりません。だからといって、聖杯の保持者である以上、自ら命を絶つということも出来ないんです」
「そっか。でも俺が思うには――センルってたぶん今は、ミュシアを守ることが生き甲斐みたいになってるとこがあるからなあ。あいつは、「何かが出来る」ミュシアのことを守りたいんじゃなくて、ミュシアが蟻の足一本自分で引き抜けないから、それを自分がかわりにやりたいんだと思うよ。ま、なんともおかしなたとえだけどさ」
「蟻の足くらいなら、どうしてもそうしなくてはいけない場合、わたしにも引っ張ることくらいは出来ると思います」
ミュシアはあくまで真剣な顔つきだった。
「いや、だからそーじゃなくて、なんて言ったらいいのかな……センルは剣なんか持ってるミュシアには興醒めしちゃうって奴なわけよ。ミュシアが自分で「何も出来ない」と思ってるから、逆になんでもしてやりたいっていうのかな。あ～あ、俺はこういうの、センルみたいにうまく説明できねえな。あいつならミュシアに、『世界のすべてを敵にまわしても自分がおまえを守ってやる』みたいに、ビシッとした決め科白を言えるんだろーけど」
「でも、もし本当に……世界のすべてが敵にまわったとしたら、大変なことだもの。わたし、そんなんだったら、センルさんに守ってほしいだなんて思わない」
（ああ、そっか。この子はかなりの真面目ちゃんだから、センルの言葉をまんまそのとーりに受けとめて、そう思い詰めちまったってことか）
シンクノアがどう言ったもんかなと思い、腕組みをしていると、背後からクワイルの魔導士であるアリッサが、ふたりに向かって声をかけてきた。
「一階の閲覧室を御案内致しますわ。わたしは第9級の位を持つ魔導司書のアリッサです。一階の図書は大体、神話・神学・民話・伝記がおもな図書となっていて……あの、あなた、神学を勉強されて

いるとセンルさまよりお聞きしたのですけれど？」
　ミュシア自身にはおそらくわからなかったろうが、シンクノアにはアリッサが何故微妙に不思議そうな顔をしたのかがわかった。神学を学んでいるような人間がマゴクと一緒にいるのも不思議なら、そんなふたりを蒼の魔導士センルが連れているのも不思議だったに違いない。それに加えてミュシアは、男物のチュニックを着ているとはいえ、顔がどこか中性的で女とも男とも判別しがたいようなところがある……そうした印象のすべてが、理知によって物事を分析するタイプの魔導士には、不可思議に見えたのかもしれない。
「はい。ぼくは神学関係のことにとても興味があって」先ほどまでシンクノアに見せていた、不安げな表情を捨て去り、ミュシアは神官ルークの顔になっていた。「正訳聖書は自分でも持っていて、何度も繰り返し読んでいます。ですが、正訳聖書というのは、歴史的に間違いのない事実として五王国の聖書認定官が認定したものだけを扱っているので……ぼくは他の国の異本聖書についても調べてみたいと思ってるんです。御承知のとおり、五王国それぞれによって聖書は若干記述が異なるものですから。たとえば、聖竜の秘宝の探索行で、ミッテルレガント王国の騎士が盾の継承者であった箇所など――ミッテルレガント王国では、彼がまるで物語の主人公であるかのような記述を聖書にそのまま載せています。他の国々についても事情は同じで、そのあたりのすべてを読み比べてみることで、何か新しい発見があるんじゃないかと、そんなふうに思ったものですから」
「まあ、そうでしたの」
　アリッサはシンクノアの存在はほぼ無視し、ミュシアことルークにそのままべったりつききりとなった。
（やれやれ。またこのパターンか）
　シンクノアは赤毛の魔導司書に対して、心の中で肩を竦めた。三人で旅をしていると、人々がまず真っ先に目をやるのはセンルだった。そして次に関心を抱くのがルークに対してであり、シンクノア

のことは見なかったことにするか、あるいは存在を認めても奴隷に対するかのように接することが多いのである。
　さらにそれにプラスして、アリッサの態度が何故こうも急に変わったのかも、シンクノアにはよくわかっていた。ルークが自分のことを「わたし」でもなければ「あたし」でもなく、「ぼく」と言ったからなのだろう。
　彼女はルークが頼みもしないのに、神学の文献的な書物が並んだ書架から次々本を引き抜き、「それであればこれがいいですわ」とか、「こちらが御参考になるかと思います」と言って、閲覧室の机の上に書物をどんどん積み重ねていった。
「あの、あとは大体、自分で調べられますので……」
　ルークがそう、やんわり断りの言葉を伝えると、魔導司書のアリッサは、頬を赤く染めていた。そして「わたしったら、ついうっかり」などと呟き、「また何か御用がありましたら、なんなりとお申し付けくださいね」と言い残して、ようやくのことで去っていった。
（さーてっと、そんじゃあまあ、俺も何か調べものをする振りでもしておきますかね）
　シンクノアは、手はじめに箱舟民族といわれるゼロラの民のことや船上を己が領土とする航海の民、テガシエルパについて書かれた本がないかと探しはじめた――ただし、視界の隅に神学の本に没頭するミュシアの姿が入る範囲内で、である。カーディル王立魔術院の領土には、強力な守護魔法が張り巡らされているとはいえ、それでもいつなんどき、姫巫女の御身に危険が迫らないとも限らない……というようにセンルに厳しく注意されていたし、シンク自身もミュシアから夢の話を聞いて以来、まったくそのとおりだと思うようになっていたからである。
　それでもシンクノアが、テガシエルパの民の祖先は念動力を持っていて、その力によって船を操ったり、また石造りの神殿に石を運んだ――といったような記述に夢中になっていると、もう一度ミュシアのほうを振り返った時、彼はそこに神経の苛立つような光景を

見出していた。
この時シンクノアは、センルのイラっとする気持ちや眉毛がピクっと動く気持ちが、初めてわかったような気さえしたものである。
（なんだ、あの野郎！？他にも席はたくさんあるのに、わざわざルークの隣に座りやがって……しかもあの、いかにも女慣れしてるような馴れ馴れしい態度。あっ、ルークの座席の背もたれに手まで回しやがった！もしかしてあっち系の男で、ルークのことを男だと思って口説こうとしてんじゃないだろうな！？）
シンクノアはセンル並みにイライラするあまり、テガシエルパの民のことが書かれた本を手にしたまま、ミュシアの向かいに荒々しく腰を下ろした。さらにはオッホン、ウォッホンと、どこか白々しいような咳までつきはじめる。
「おや。どうやら君の、赤い瞳の用心棒殿が戻ってきたようだね。それでは、わたしはこれで失敬させていただくが――先ほどの話、よく考えておいてくれたまえ」
「あの、わたしはそういうことは……」
だが、ミュシアが言葉のすべてを言い終える前に、金髪碧眼の若い男は、どこかへ去っていってしまった。銀糸を施した白の高価なローブを身に纏いつかせているあたり、どこかの貴族の息子かとシンクノアは思ったが、彼の中でなんといっても神経の障る特徴は、今の男のもったいぶったような、人を見下した目つきと話し方だったかもしれない。
「おい、ルーク。一体なんだよ、あいつ！？」
シンクノアは小声ながらも、苛立つ感情を抑えきれずに言った。
「赤い瞳の用心棒って、俺が用心棒みたいなもんだってわかってるってことは、おまえが女だってこともわかってるってことじゃないのか！？」
先ほどまで金髪の男が座っていた席まで移動しながら、シンクノアは「女」という言葉を特に小さめに発音して、ミュシアの隣に腰を下ろした。

「あの人、わたしが姫巫女だって、知って……」
ミュシアは震える声でそこまで言うと、ポタリ、と異本聖書の本の上に、涙をこぼした。シンクノアが彼女から目を離したのは、たったの五分かそこいらの話である。にも関わらず、ミュシアが両手で顔を覆って泣きはじめたのを見て――シンクノアはますます、先ほどの男に敵愾心と苛立つ気持ちを募らせるということになった。

第3章　円卓の魔導士

　センルが王立図書館の二階にある通路から、魔導院生の寮にまで歩いていくと、通りすがった何人もの魔導生たちが蒼の魔導士である彼のことを振り返って見た。
　それもそのはずで、魔導学院の最高府である大学院を卒業したあとでも、授与される魔導士の階級というのは、大抵の場合せいぜいがリディルかナディーン止まりくらいなものである。国にひとりしかいないブリンクは別としても、王立図書館の最上階にある知識の殿堂――蒼の図書室の書架を自由に出入りできる魔導士は、実際数が少ないというだけでなく、彼らの姿を図書館内で見かけることさえ稀であった。
　というのも、蒼の魔導士というのは、間者として他国に放たれるか、王府で役人として働くか、あるいは闇の魔導士を狩るといった職務に就いていることが多く、王立魔術院で教職に就く者はほとんどいないといっていいのである。
　センルは魔導教員たちの宿直室まで来ると、そこにある空間転移魔法陣の上で両の手をひらを合わせ、ワープのための呪文を唱えた、途端、六芒星魔法陣が青く光り輝きはじめ、センルは次の瞬間にはまったく別の場所にいた……すなわち、カルディナル王国のブリンク、エリメレクの公邸にある＜魔導会議室＞に、である。
　このエリメレクが普段公務を行っているとされる魔導邸もまた、王立図書館と同じく外の見た目と中とがまるで違う空間の広がりを持っていた。というより、まさかこれが国の最高魔導機関府ではありえまい……といったような、公邸はそのような蔦の絡まった木造の外観をしている。そして、とても小さくもあるのだが、一歩玄関口から足を踏み入れるなり――そこは床にも壁にも白い聖石のみが使われた、無限のようにも思われる広い空間が存在しているのだった。

エリメレクはセンルの到着を予期していたのか、空間転移魔法陣のある脇部屋前で彼のことを待っていた。そして挨拶もそこそこに「まあ、色々と言われなさるだろうが、その点はぐっと堪えて我慢してくだされよ」と、苦笑しながらセンルに微笑んだのであった。

「その点は、十分承知の上です」

センルは軽く溜息を着きながら、エリメレクに短くそう答えた。

＜魔導会議室＞では、センルと同じロダールの位を持つ、円卓の魔導士と呼ばれる十人の魔導士たちが顔を揃えていた。この十人の蒼の魔導士のうち、マキラという名の四十代の女性以外、全員が男性だった。七十を過ぎているエリメレクに年齢の近い魔導士ふたりが、ゼファルとカドミエル、六十代くらいに見える魔導士ふたりがエレドとセヴァルダ、五十代半ばほどに見える魔導士ふたりがガリューンとスクナ、四十代ほどに見える魔導士ふたりがナシールとオレグ、そして一番年が若く見える最後のひとりがセリュオンという名の男であった。

みな、それぞれ思い思いの顔をして入室してきたセンルのことをちらと眺めやっていた――だが、そこはやはりくだんの魔導士というべきか、彼らの顔の表情を順に追っていっても、センルには彼らが内心思い計っているであろうことが、さっぱり読めないままだった。

「これだけの顔ぶれを十分以上も待たせるとは、ロンディーガの宮廷魔導士殿はよほど礼儀をわきまえたお方と見える」

「そうよのう。流石、その昔破門にされただけのことはあるわ」

ゼファルとカドミエルが、まるで呼吸を合わせたようにそう言い、互いに笑いあった。そして年長者の彼らの笑いが伝達したように、他の象牙の丸いテーブルを囲っている面々も声にだして笑った。

けれども唯一、マキラという名の女魔導士だけが変わらずに厳しい顔の表情を保っていた。彼女は魔導士界というのは上にいけばいくほど嫉妬の情が強まる社会であるというのを、嫌というほど思い知っていたからである。

「なんにしても、すっぽかされなくて結構であった」と、マキラは感情を窺わせない鉄のような冷たい声音で言った。どうでもいいことかもしれないが、彼女は陰で＜鋼鉄の魔女＞と仲間から渾名されていた。「ロンディーガの宮廷魔導士よ。例の禁術の件に関してだが――我らの間で討議した結果、そなたの思うつぼということになったぞ。喜ぶがいい」

マキラは他の円卓の魔導士たちの機先を制するように、先にそう結論部分を述べた。というのも、彼女には他の蒼の魔導士たちが焦らしに焦らしてから最後にその結論部分を述べるであろうことが、よくわかっていたからである。

これには、ゼファルとカドミエルだけでなく、セリュオン以外の円卓の魔導士たちも流石に面白くない顔をしたが、マキラはまったく素知らぬふうであった。

唯一、エリメレクだけが内心（マキラが面倒な手間を省いてくれて助かったわい）と思っていたような具合である。

「しかし、ですな」と、疑い深そうな緑の瞳に、茶色の薄い頭髪をしたエレドという男が言った。彼の役職は王府の魔導管理官である。

「あなたの知恵とエリメレクさまの知識を合わせて＜隕石落としの術＞（メテオフォール）が完成したのは結構なことですが……やはりこの術は危険すぎるとわたしは思っています。大体、目標に必ず当たるかもわからず、一歩間違えば甚大な被害が市民に及ぶのですぞ」

「その点については、これまで何度も話しあってきたではないか」

再びマキラが声にだして意見した。センルはこの時彼女の顔にうんざりとした表情が浮かぶのを見て――同じ問いが何十度となく繰り返されたのだろうと察していた。

「＜地の崖ての民＞とかいうふざけた連中に、カルディナル王国を滅ぼされてしまったのでは、元も子もない。それよりは、一部に被害は出たとしても竜を撃退できるチャンスに賭けたほうがまだしも得策というものだ……というのが、我々が出した結論だったではな

いか」
「ふん。マキラよ、随分ロンディーガの宮廷魔導士殿の肩をお持ちになるな。もしやエルフの色香に惑わされたのではないか？」
「なっ……貴様、何をいうか。今の侮辱的な言葉、すぐに取り消せ。わたしは母国の将来のことを思えばこそ、こうして呼び出しに応じ、わざわざイツファロ王国から戻ってきたのだぞ」
ナシールはマキラと同窓生であったが、その頃から常にライバル関係にあり、彼は彼女にすべての魔導教科において勝ったということがなかった。つまり、いつも二番手だったのである。センルはそうした細かい事情のことなど、露ほども知りはしなかったが――このふたりがもともと馬の合わぬ仲であるらしいというのは見てとっていた。
「まあまあ、落ち着きなさい、ふたりとも」
睨みあうマキラとナシールの間にエリメレクが割って入った。
「＜地の崖ての民＞とやらが次にもし攻め入るとしたら、どこの国かといえば……我らカルディナル王国よりは、ミッテルレガント王国かロンディーガ王国である可能性が高い。そうでしたな、センル殿？」
「ええ。そう思います」
センルは自分と同じ位の蒼の魔導士たち十人を見回して答えた。二百年以上もの昔は、円卓の魔導士と呼ばれるこの十人のひとりに選ばれたいと思っていたものだったが、今はそうならなかったことがまったく残念ではなかった。
「カルディナル王国は誰もが知ってのとおり、魔法の防備が非常に強い……また、それだけでなく魔法の力と竜たちの力、また奴らの操る飛空艇とがどういう連鎖反応を示すか、＜地の崖ての民＞にもわかっていないというのが実情ではないでしょうか。私がエリメレク殿から得た情報を精査して思うに――彼らの間で魔法の力のようなものを使ったという痕跡はないように思われる。では、一体彼らはどんな力を使って飛空艇を空に浮かべて移動しているのか、とい

うことに当然なりますね。おそらく、竜を従わせているのは、魔法の力によってというのではなく、彼らしか知らない特殊な飼育法によってでしょう。また飛空艇には我々にはまだわからない、だが魔法の力に近い動力源があるのだと思われます。その力と魔法の力がどう引きあうかわからない、また竜たちが魔法の磁場の強いこの国で完全に彼らの制御下にいるものかどうか……１００％絶対に近い安全ということを考えれば、私が奴らの国の軍師であったとしたら、カルディナル王国のことは少なくとも後回しにすると思いますね」
「だが、奴らはそうした我々の思いの裏の裏をかいて聖都を滅ぼしたんですぞ」
闇のように黒い瞳をした、オレグという魔導士が言った。しゃちこばったような黒い髭を伸ばしているが、髪の毛が後退しているせいもあってか、それはあまり彼に似合っていない。
「今度もまた裏の裏をかいて我がカルディナル王国の王都を攻め滅ぼさないなどと、一体誰に断言できるものですかな？」
「そうとも」と、オレグの隣の席に座るガリューンが言った。彼は顔に大きな傷痕があり、それは魔鳥ハルピュイアと戦った時に出来たものだと人から噂されている。瞳の色は灰色で、長い髪のほうは白髪だった。「国防といったものは＜もしも＞と＜万が一＞ということを考えてこそ、万全の姿勢が整うというもの。ロンディーガの宮廷魔導士よ。この取引はどう考えてもそなたの国のほうに利が大きいように思われてならぬな。何故なら、我らは＜隕石落としの術＞などという危なっかしい術など使わずとも、十分魔導の力によって飛空艇を操る連中と渡りあうことが可能かもしれぬ。ロンディーガは国土の約三割が砂漠地帯……そこに隕石郡を降らせてそなたが自国を守りたいと考える策は理解できる。その際にカルディナル王国の有能な魔導士を貸しだしてほしいという気持ちもな。だが、メテオフォールというのは実に危険な術だ。また何故この魔法が禁術といわれるのか、当然その理由についてはそなたも知っていよう？」
「もちろんです、ガリューン殿」

センルは実際には彼のほうが二百数十歳年下でも、年長者を遇するかのように恭しい態度で言った。
「我がロンディーガとミッテルレガント王国は、西境にある移動する砂漠のオアシスを巡って長く国境を争ってきました。このオアシスはある時にはミッテルレガント王国のものとなり、またある時にはロンディーガ王国のものとなり……まあ、歴史に弄ばれるような形で、数奇な運命を辿ってきたのですね。そこで私は、常々こう考え続けていたのですよ。オアシスの町々に防御魔法を張り、そうした上で＜隕石落としの術＞を使ったとすれば――ミッテルレガント王国は二度とオアシスの町を自分たちのものにしようなどとは考えまい、と。ですが、やはりメテオフォールというのは禁術と呼ばれるだけあって危険な業です。私が砂漠の上に隕石を落とすつもりでいたとしても、途中でコントロールが怪しくなり、極端な話、ロンディーガの王都の真上にそれを直撃させてしまうかもしれないわけですから。ですが、もしこの術を完璧に制御できたとすればと考え、魔導物理学に関して書かれた本などは、ほとんど片っぱしから読んだものでした。ここで、魔導物理学及び魔導力量学、魔導重力学及び魔導エネルギー学の権威として名高い、セリュオン殿にお聞きしたい。隕石の軌道計算については、どのくらいの正確性をもって算出できるものでしょうか？」
　セリュオンはじっと黙ってセンルや他の蒼の魔導士たちの話を聞いていたが、腕組みしていた手をとくと、自分の斜め向かいにいる先輩格の魔導士セヴァルダに、気遣わしげな視線を送った。何故といってセリュオンとセヴァルダは得意とする専攻魔法がほとんど同じだったからである。にも関わらず、自分のほうに先に話を振られたことに対して――彼は若干、戸惑いを覚えていた。
「センル殿もご存知のとおり、魔術の論理と実践というのは、まったくの別物ですからね。たとえば、みなさんはわたしがこんなことを言うと、きっとお笑いになることだろうが……初等部の試験にこんな問題がありますね。『直径１０センチの火球を作りだし、それ

をあなたは7メートル先の地面に直撃させました。その時に生じたエネルギー量と被害の規模を数式と図によって書き記しなさい』……まあ、この答えがわかったところで、それと同じ魔法が使えるかどうかというのは、まったくの別問題です。隕石の軌道計算にしてみたところで、月や星の運行を含め、すべてのことを考慮に入れた上、数値を算出したところで……せいぜいが９２．４％程度の確実性しか得られません。しかもわたしは、これを少し高めの数値として今申し上げました。実際にはこの数値が絶対に１００となることはないことから、＜隕石落としの術＞は危険な業とされ、使う魔導士は今も誰もいないんですよ」

魔導物理学の教えを手ほどきしてくれた、セヴァルダのことを慮り、セリュオンはあえて彼のほうをじっと見つめ、「そうですね、先生？」といったように相手からの返事を待った。

「そうじゃ。メテオフォールは敵国を滅ぼすかわりに、また己が国をも滅びへ追いやりかねない危険な業じゃ」と、セヴァルダはしきりに黒いローブの前を流れる滝のような髭に触れながら言った。「それに、宇宙の均衡を人間の手で破ろうとする業でもある……ゆえに、わしはいくらカルディナル王国そのものを守るためとはいえ、この禁術に手を出すことには最後まで反対した。じゃがまあ、良い後継者もいることだし、わしはそろそろ引退しようかと考えておるのでな。多数決で決まったことに対し、今さらあれこれ言う気はない……が、宇宙の神を怒らせぬよう、おまえさんらはよくよく注意することじゃ」

「＜隕石落としの術＞に関しては」と、ここでエリメレクが座上の総責任者として、ようやく口を開いた。「わたしが最後まで責任をもってよく監督しようと思うておる、セヴァルダよ。わたしはむしろおまえさんの反対を内心嬉しく思うておった。だが、我らの話しあいの席でも言うたとおり――メテオフォールは我々にとって最後の切り札のようなものだと考えておる。奴ら＜地の崖ての民＞とやらがカルディナル王国へ竜とともに攻め入ってきた時に、隕石が降

ってくることで奴らの度肝を抜いたとするな。したらば、奴らはただそれだけで退却するだろうと思うのだ……また、ロンディーガ王国だけでなくイツファロ王国やミッテルレガント王国にも内々にそうした通知をだせるという点も大きい。今はどこの国でも飛空艇が次にどの国へ攻めこむかということで、怯えきっておるのでな。また、イツファロ王国には飢饉があり、ミッテルレガント王国では謎の奇病が流行っておるという話だ。これもまた、姫巫女さまがルシア神殿に不在であることの影響だと、民草はみな思うでおる……騒ぐ人心を落ち着かせるためにも、最後に奴らを撃退できる手がある と国の国防に関わる魔導士に通達するのは、それを使う・使わない以前に大切なことかもしれぬのだよ」

「確かにな」

セヴァルダは、実際の年齢よりも年のいった皺だらけの顔で微笑んだ。

「それにエリメレク殿、そなたも騒ぐ国王にとりあえず何か＜地の崖て国＞に対抗できる術策があるということを、なるべく早く奏上せねばならんのじゃろう？わしは政治的なことにはまるで興味なくこの年までやって来たが、そなたのブリンクとしての苦労は多年に渡って見てきたつもりじゃ。そのそなたが禁術と知った上で使用の許可を我ら円卓の魔導士に求めた以上は――禁術許可の書類に、わしも快くサインせねばなるまいて」

ここで、エリメレクが一番の年長者であるゼファルに禁術許可の書類を手渡した。彼はそこに書かれたことに特に目を通すでもなく、羽根ペンでさらさらと自分の名を書き、嵌めていた指輪で認証の印を押した。そして書類は連署となっているので、次にそれはカドミエルの手に渡り、彼もまたゼファルと同じようにしたあと、隣のガリューンに書類を渡した……そして、十名全員の署名が集まると、エリメレクは「ご苦労であった。それではみな、再びおのおのの職務へ戻られよ」と解散の言葉を述べたのである。

エリメレクはまた、円卓の魔導士たちが空間転移魔法陣の中へ消

える前に、ねぎらいの言葉をひとりひとりにかけるのを、当然忘れはしなかった。
「一国のブリンクといったものは、まったく大変なものですね」
円卓の魔導士たち十人が全員いなくなったあと、＜魔導会議室＞に残されたセンルは、隣のエリメレクに向かって溜息を着いてみせた。
「センル殿もご存知のとおり、円卓の魔導士たちも、そもそもの発祥の時にはこうではなかったのだよ。ほれ、最近何かとわたしとセンル殿との間で話題になる聖書の話によれば……三千年前の秘宝探索行の折には、円卓の魔導士たちは八面六臂の活躍を裏でしたものだった。その時の頭がのちのブリンクであり、彼の親友がロダール、また彼の腹心の部下がマキルやセリクであったというように、円卓の魔導士というのは本来は、堅い結束と絆で結ばれていたのだよ。ところが一度魔導士制度なるものが整い、国に平穏な時代が続くと――どうしてもそうしたものというのは、形骸化が進んでしまう。わたしは思うのだがな、センル殿。我が国の魔導士制度だけでなく、ルシアス王国の巫女・神官制度含め、中央世界は曲がり角に差しかかる次期に来ておったのではなかろうか。もちろん、＜地の崖て国＞などという国が本当に存在するかどうかも、我々にはまだはっきりとはわからん。だが、中央世界に再び竜が現れたということは、神からの大きな警告のように思えて、わたしにはならんのだよ」
「『おのおの悔い改めの道に入り、己が道を悟れ』ですか」と、センルは聖書の一説を口にした。ルシアス王国の聖都にあるルシア神殿に姫巫女がいなくなると、方々に飢饉や病いが起きるというのは、昔からよく言われていることだった。だがセンルは、実際にそのようなことが世界に起きつつあるということをエリメレクから聞いてはじめて――聖竜の秘宝探索行の重要性に、初めて気づいたのである。
「聖竜の秘宝には世界のすべてを癒す力が秘められているそうですね。けれども、邪悪なる者たちはそれを使われると非常に都合が悪

い……ゆえに、あらゆる力を持ってしても探索行を妨害してくると聞いています。そこで、どう思いますか、エリメレク殿？＜地の崖て国＞の連中の目的は、おそらくこの秘宝集めなんですよ。そして以前にもお話したとおり、ルシアス神殿の地下の宝物倉に眠っていたであろう聖槍は、奴らの手に渡ってしまった可能性が高い。もし我々がこうしている間にも、向こうが残りの鎧や盾といったものを集めてしまった場合……どうされました、エリメレク殿？」

不意に、特にこれといった脈絡もなく、エリメレクがふぉっふぉっと笑いだしたのを見て、センルは奇異な思いに包まれた。

「いやいや、お互いに持っている情報は小出しにしませんとな、センル殿」

エリメレクはそう言って、＜魔導会議室＞にある石造りの椅子に腰かけた。室内にある象牙の暖炉には魔法の炎が焚かれ、暖炉の上方にはずらりと、代々のカルディナル王国ブリンクの肖像画が並んでいる。

「もちろん、わたしにもわかってはおるのですよ、センル殿。賢いあなたは、円卓の魔導士の面々に直に会い、彼らのことを信頼しかねると判断された……ゆえに、わたしに話したことは彼らにも伝わってしまうかもしれないと危惧されたのでしょうな。ですが、わたしはセンル殿とは違い、これ以上遠慮はしませぬぞ。さあ、これを見てくだされ」

エリメレクはそう言うと、首にかけた金鎖を引き抜き、そこにかかった金と銀の二連の指輪をセンルに見せた。

「エリメレク殿、一体それは……？」

見た目のほうは、特にどうということもない、なんの変哲もないただの指輪だった。だが、そこにエルフ特有の力にも似た、神聖な強い何かが宿っているのを、センルは深く感じとっていた。

「これこそは、カルディナル王国代々のブリンクに伝わる、＜聖竜の指輪＞ですよ。まあ、聖竜ルシアスがのちに妻となったルーシュに贈ったことから、ルーシュの指輪とも呼ばれておりますが……ど

うですか、センル殿？姫巫女さまにこの品を献上される前に、あなたが一度これを指に嵌めてみなさるというのは？」
「いえ、結構ですよ」
（エリメレク殿はもしや自分をからかっているのだろうか？）と一瞬センルは思ったが、彼が基本的に無駄なことや余計なことを言わぬ人物であるということは、短いつきあいながらもよくわかっていた。
　つまり、エリメレクが首から金鎖を取り、またその鎖から二連の金銀の指輪を外そうとしているということは――嘘でも冗談でもなく、＜本当にこれが聖竜の指輪である＞ということに他ならないのだろう。
「いやいや、わかりますよ、今のセンル殿のお気持ちは」と、エリメレクはさも愉快そうに目を細めて笑った。「正直なところを言って、我々は出会ってすぐに意気投合したも同じ仲とわたしのほうでは思うておりました……ですから、センル殿が二度目に来られる際には、おそらく他の旅のお仲間を連れて来られるだろうと思っておったのです。ですがあなたは再びおひとりで来られ、＜隕石落としの術＞について、自分が解析したことのすべてをわたしに明かされたというわけですな。まあ、この問題が解決したからには、次の段階へ進むのがよろしかろうとわたしは思うのですよ。さあ、センル殿。この指輪を嵌めてごらんなされ」
　センルはエリメレクに言われるがまま、金銀の二連の指輪を左手の薬指に嵌めた（というのも、そこにぴたりと収まりそうな気がしたからであるが、この魔法の指輪は、実はどんな指にもぴったり収まるように出来ている）。指輪を嵌めたからといって、センルには何か特別な強い変化が現れたようにはまったく感じられなかった……そこで指輪を外すと、エリメレクにそれを返したのである。
「ふぉっふぉっふぉっ。拍子抜けしましたでしょうな？」
　エリメレクは歌うような心地好い響きで、大笑いした。
「これが、カルディナル王国のブリンクに代々伝わる秘宝というわ

けですよ。聖竜の秘宝の一部などというから、てっきり絶大な魔力でも宿っているのかと思いきや……この指輪に宿っておりますのは、人類すべての言語を理解する力、また動物や植物などと話す力なんですよ。指輪の持ち主は、聖五王国すべての言語を操る力と、辺境王国の様々な言語のすべてを理解し、かつ自分でも話すことが出来るようになり、さらには動植物とも会話することが出来るようになるというわけです。ところでセンル殿、わたしは大学院時代は魔法言語学をおもに専攻しておりましてな、これでも各国の言葉にはかなり精通しておるつもりです。また、エルフ語も若い頃から堪能に話すことが出来ましたし――このことが意味すること、あなたにはおわかりになりますかな？」

「つまり、せっかくの指輪もエリメレク殿にとっては無用の長物だったと？」

「流石にそこまでは申しませんがな」

エリメレクは再びふぉっふぉっと小気味よく笑った。

「ですから、この指輪はあなたの旅のお仲間のひとりにお譲り致そうと思うのですよ。秘宝探索行が終わったあと、集められた秘法が一体どうなるのか、それは誰にもわかりません。聖書に書かれているのは、それが使われた時に世界が癒され救われたという＜結果＞についてだけですからな。出来ることならば、この指輪があなた方の旅に役立つよう、この老体にできることといえば、ただ神に祈ることくらいかもしれません。しかしながら……」

魔導邸内は、魔法の防御機能が強く働いているので、他人に秘密が洩れる心配はほとんどないのだが――ここでエリメレクは、ふと小声になると、センルに耳を貸すよう合図した。そしてセンルは、エリメレクからある重大な事実を打ち明けられたのである。

「……それはつまり、秘宝の盾の継承者が今王都カーディルへやって来ているということですか！？」

「まあ、一応そういうことになりますかな」

若干顔の表情を曇らせて、エリメレクは言った。

「して、その彼がですな。わたしにこう言うのですよ。センル殿、あなたが実に腹の黒い魔術師で、大人しい姫巫女をいいように扱い、全世界の覇権を握ろうとしているのではないか、と。ああ、もちろんわたしにはわかっております」

エリメレクはそこで、センルが弁明の言葉を述べようとするのを、両手で押し留めた。というより、センルは自分が姫巫女と聖竜の剣の保持者かもしれない男を連れているなどとは、まだ彼に話していなかったのである。にも関わらず、何故エリメレクにはそこまでのことがわかったのか、また＜聖竜の盾＞の保持者にしても、何故カルディナル王国のブリンクにそんな忠告をしたのか、センルはまるで見当もつかなかった。もしや自分は、長く間者に見張られていたにも関わらず、そのことにまったく気づかずにいたのだろうか？

「確かに、センル殿にしてみれば不思議なことでしょうな。ですが聖書にもあるとおり、秘宝の保持者というのは、互いに運命に導かれるようにして出会うものなのですよ。千年前にあった秘法探索行にしても、三千年前にあったそれにしても……聖書の記述を読むと、ある箇所においてはあまりに話がうまくゆきすぎていて、本当にそうだったのかと疑いたくなるような箇所がいくつもある。ですがまあ、実際に探索行がはじまってみると、そんなものなのかもしれませんな。今回姫巫女殿は、自分を十分守ってくれる魔力を持ちあわせたハーフエルフのセンル殿と最初に出会い、それから次に聖竜の剣の保持者に出会われた……」

「あの、エリメレク殿は一体何故それを……」

不意にセンルは喉が渇き、象牙のテーブルの上にのった水差しから、グラスに水を注いで飲むことにした。

「いえ、わたしのはただの簡単な推理のようなものです」

クリスタルの水差しから、自分もコップに水を注ぎ、エリメレクもゆっくりとそれを飲んだ。

「秘宝の保持者というのは、近くにそれを持つ者がいると自然とわかるのですよ。そこでわたしはこっそり、姿変えの術を使って若者

に化け、センル殿が宿泊されているホテルのロビーで、あなた方のうちの誰かが姿を現すのを待っていたのです……そこで、確信したわけですな。ただ、わたしには魔導の心得があるからわかっただけのことで、剣に強い封印がかかっていることから見ても、姫巫女殿にそれが本当に聖竜の剣であると、わからなかったのも無理はありません。それに、彼らはその時、物陰から様子を窺う若い男のことなど視界にも入ってなかったでしょうから、わたしは自分の推理の正しさを裏付ける証拠を得ると、そそくさとこの公邸まで戻ってきたといったような次第ですよ」

「エリメレク殿はまったくお人が悪い……」

いや、それとも流石一国を背負ってブリンクとして長く立っておられるだけのことはある、と賛辞の言葉を送ったほうが良かっただろうか？センルは降参するように溜息を着き、そして前髪をかき上げた。

「ですが、＜聖竜の盾＞の継承者殿は、何故私が大人しい姫巫女を自分のいいようにして覇権を握ろうとしている、などと思ったのでしょうか？」

「まあ、そこはそれ、偶然のなんとやらです」

エリメレクは考え深げな眼差しになると、鉄灰色の髭を何度も撫でながら言った。

「この場合のわたしの立場というのは、あくまで中立的なものだということを、センル殿には何卒御理解いただきたい。また、わたしのほうであの方にセンル殿の秘密のようなものを洩らしたということは一切ないということは、堅くお約束致します。ですがあの方はすでに、センル殿が姫巫女と行動をともにしていると知っているのですよ。ですからわたしに、＜ルーシュの指輪＞をむざむざ渡してしまうつもりなのかと、激しく詰問されました……して、そのことに対するわたしの答えというのはですな、この指輪はセンル殿か姫巫女が持つのがよろしかろうということでした。姫巫女がセンル殿に出会われたということは、センル殿が本来の指輪の継承者であっ

たからに他ならないと、わたしはそう御説明したのですが、あの方はなんとしても取りあってくださらず……」
「まあ、それはそうだろうな」
　センルは肩を竦め、溜息を着いた。
「なんにしても、わたしもエリメレク殿と同じく、世界の各国語にはかなり精通しているほうだと思うし、エルフ語については言うに及ばずといったところ。アスラン殿がそれで満足なさらぬというのなら、＜ルーシュの指輪＞はエリメレク殿が直接姫巫女にお渡しになってはいかがですか？しかし、私が姫巫女とともにいる限り、あの方は決して＜聖竜の盾＞をこちらに渡したりはなさるまい……まさか自分の過去の行状に、こんなところで復讐されようとは思ってもみませんでしたよ」
「そんなに落胆されることもありませぬぞ」
　エリメレクはどこか不敵な顔つきになると、再びふぉっふぉっと愉快そうに笑った。
「こうした先々のことを見越しましてな、わたしはアスラン殿にこう取引を申し出たのですよ。つまり、センル殿には再び飛空艇や竜が襲ってきた時に備えて、＜秘策＞と呼べる術がある。それと引き換えに＜聖竜の盾＞を一時的に姫巫女さまに貸して差し上げるのはいかがかと……するとあの方は、苦渋の選択をする時のように唸っておられましたな。何しろ、アスラン殿御自ら国を出てここまでやって来られたのは、わたしに直接＜地の崖て国＞の連中をどう撃退したら良いかと聞くためだったのですから。長く国が仇としているセンル殿から秘策を乞うなど、誇り高いあの方には屈辱以外の何ものでもなかったかもしれませぬ。なんにしても、わたしがアスラン殿とその話をしたのがおとついのこと……まあ、返答が決まり次第、あの方はもう一度わたしのところへやって来られるでしょうな」
「困りましたね」
　センルはまたも溜息を着き、象牙のテーブルの上で両手を組むと、どうしたものかと思案しはじめた。千年前の秘宝探索行では、盾の

保持者と剣の保持者との間で、美しい姫巫女を巡り争いが起きたと聖書には書かれている……ふたりは結局最後まで和解はしなかったようだが、それでも姫巫女の御ためを思い、旅に随行し続けたということらしい。

その家柄からいって、アスラン殿が探索行へ加わるとはセンルには想像できなかったが、それでも自分が最初の大きな躓きをミュシアに与えてしまった気がして、彼にはそのことが心に重くのしかかっていた。

「まあ、なんにしても」

エリメレクは隅の柱時計が第一（ハゼル）の刻を刻むのを合図とするように、椅子から立ち上がった。

「一度我々は会見の場を持つ必要がありそうですな。わたしとアスラン殿と、センル殿の三人でか、あるいはそこに姫巫女殿や聖竜の剣の保持者も加えて……この指輪につきましては、わたしの姫巫女殿に対する忠誠の証しと考え、是非お受けとりくだされ」

「いえ、今はまだその時ではないと思います」

センルは内心では、自分にそんなことを決める権限はないと思いつつも、やはりそう答えざるをえなかった。

「アスラン殿と話し合いの場を持った時に、すでにその指輪が姫巫女の指にあったりしたら、彼も面白くないものを感じるでしょう。指輪のほうを戴くのは、アスラン殿がよく納得されてから、あくまでエリメレク殿が姫巫女に直接渡されるのがよろしいかと思います。おそらくは、それも彼の目の前で……」

「そうかもしれませんな」

エリメレクはセンルの意志を確認すると、今一度金鎖に二連の指輪を通し、それを再び首にかけた。

「ではセンル殿、これにてわたしは失礼致しますぞ。王府のほうに出向いて、片付けねばならない少々厄介な仕事がありますのでな」

「はい。何から何までお気遣いいただき、まことに痛み入ります」

センルが真心のこもった面差しでエリメレクのほうを見つめ、そ

れから頭を下げると、彼はセンルがよく理解できない種類の微笑みを浮かべて、空間転移魔法陣の光の輪の中へ消えた。
「さて、と。もう昼の一時過ぎ、か。あいつらは昼飯を食ったあとだろうから、私も魔導生の食堂で軽く何か食べることにするか。そのあとでミュシアとシンクノアを図書館の二階から上へ案内してやろう」
――だがこの日、センルは妙に元気のないミュシアと、理由を聞いても答えないシンクノアとともに、すぐヤースヤナ・ホテルのほうへ引き上げてくるということになった。
シンクノア曰く、「孔雀肉を食べたらミュシアの具合が悪くなった」ということだったが、どうもそうではない気がして、帰り道ではセンルが彼女とともに馬へ乗ることにした。その時、センルはあくまで遠回しにではあるが、ミュシアにそれとなく探りを入れてもみた……だが、やはり彼女は重い口を閉ざしたままだったのである。
「それで、一体何があった?」
シンクノアが寝室の側の暖炉に火を入れ、ベッドに横になっているミュシアのことを確認すると、「寝ている」という合図を彼はセンルに送った。
「なんかさー、いっけ好かない男がミュシアにほんの五分くらいかな。話しかけてきたってわけ。そのあとなんでかわかんないけど、あの子ぼっろぼろ泣きだしちゃって……どう思うよ、センル。たったの五分で初対面の女子を速攻泣かせちゃう男って」
「そいつは、どんな奴だった?」
センルは、嫌な予感がした。何より、エリメレクが「大人しい姫巫女」と言った言葉が今さらながら気にかかっていた。とはいえ、アスラン殿についてはセンルも、噂に伝え聞いているというだけで、容貌などについて詳しいことを知っているわけではない。
「たぶん歳は二十五くらいかな。んで、金髪に蒼い瞳のちょっとカッコいいイケてる兄ちゃんみたいな?あと、着てるものから察して、すごく裕福な商人の息子か貴族のぼんぼんっていうような、そんな

感じ」
「そうか。確信は持てないが、そいつがたぶん＜聖竜の盾＞の継承者だ」
「いぃっ！？じょーだんだろーッ！！」と、シンクノアはミュシアが寝ているのも忘れ、大声で叫んだ。「俺、あんな高慢ちきな匂いをぷんぷんさせてる男と、うまくやってく自信ないぜ。俺がセンルとうまくいってんのはさあ、単にあんたが金蔓ってだけじゃなく、いい奴だからだもんな。けど、あいつはなんかちょっと違うんだよ。一目見た瞬間に絶対馬が合わねえって速攻思ったもん」
「まあ、貴族といったらいいのか、なんと言ったらいいのか……」
シンクノアにどこまで話したものかと迷い、それと同時に彼は一体ミュシアに何を話したのだろうと、センルはそのことが気になっていた。あの蒼の魔導士のことを信頼するなと言われたのか、それとも君のような者が本当に姫巫女なのかどうかと、疑いの言葉でも投げかけられたのか……いや、その程度のことでミュシアがあんなにも精神的に参るだろうかとセンルは思いもした。
（アスラン殿にはわからんだろうが）センルはシンクノアが淹れた紅茶を飲みながら考えた。（あの娘はああ見えて意外に強いからな。下手にちょっかいを出せば、むしろ火傷をするのはあの方のほうだろう。だが、話をしていたのはたったの五分かそこらだという。確かあの方は魔導騎士として、かなり優秀な成績で国の魔導院を卒業されたと聞くが……ということは、何か精神に暗示をかける魔法でも唱えられたのだろうか？）
「それで、センルのほうはどーだったわけ？」
センルはミュシアには、例の禁術について何も話していなかったが、シンクノアにはエリメレクと長くそのことを協議していると、詳しく話してあった。
「円卓の魔導士たちはみな、禁術許可の書類にサインしてくれたよ。まあそれというのも何もかも、エリメレク殿のお膳立てのお陰といったところだな。あの方はまた、＜聖竜の指輪＞の保持者でもあら

れて、それをミュシアに譲りたいと言っておられた。これでまあ、聖杯・剣・指輪・盾の消息まではわかったということになる。残りは聖槍と鎧と冑か。聖なる槍は敵方に奪われたものと思われるが、鎧と冑というのが一体どこにあるものなのか、私にはさっぱりわからん」

「……センルってさ、時々すげえことを何気にさらっと言ってくれちゃうよな」

貸し馬車屋に馬を返した帰り道、町の大通りで買ったパンを、鉄串に差して軽く焼きながら、シンクノアは呆れたように言った。他に食糧雑貨店では、柘榴シロップのかかったケーキや、若鶏の蒸し焼きやチーズなども買ってきた。こうしたものは店のおかみに前もって注文がしてある品だった。

「そのかわり、私はとんでもないヘマも同時にやらかしたぞ。先ほど言った＜聖なる盾＞の継承者であるアスラン殿な。彼はある理由から私を激しく憎んでいるはずだ。ゆえに、私がその背後についている姫巫女にむざむざ＜盾＞を渡してなるものかと頑強に拘っているらしい……だが、例の禁術と引き換えに、もしかしたら向こうが折れてくるかもしれん。ミッテルレガント王国でも、例の飛空艇と竜の襲来事件は、重大な国防問題だろうからな」

「ミッテルレガントのお貴族さまか～。そんじゃあ無理ないかもしんないなあ。だってセンルがロンディーガの宮廷魔導士になって以来、ロクセリアっていう有名なオアシスは向こうの手に渡ってないんだろ？」

「ああ。砂漠のパラダイスだかなんだか知らんが、ああいうのが本当にロンディーガの国民は好きだからな。もっともこのオアシスの町の名は、ミッテルレガントではミグラレント、レガント語で麗しの都を意味する言葉で呼ばれているらしいが……私が死んだという噂でも聞かない限りは、ミッテルレガントは再びロンディーガの領土を侵犯することはないだろう」

この時、不意にキィとドアの開く音がし、蒼白な顔をしたミュシ

アが口許を押えながらよろめいて寝室から出てきた。
「おい、大丈夫か！？」
ミュシアは首を横に振り、センルの手も振りほどくと、洗面器の置かれた台の前まで走っていった。そこでうぇっと一度吐き、暫くののちに吐き気がおさまると、水差しからコップに水を注いで、口の中をゆすいだ。
「少しは、楽になったか」
センルがずっと背中をさすってくれていたのはわかっていたが、ミュシアはこの時、そうした彼の親切心を素直にありがたいとは思えなかった。というより、相手にみっともない姿を見られたことが恥かしく、このまま消え入りたいようにさえ感じられて仕方なかった。
「これは、私が片付けておこう。だからおまえは向こうで休……」
「わたしに優しくしないでくださいっ！！」
自分でも思ってもみない大声でそう叫んでしまい、ミュシアは自分でも体温が一気に上がるのがわかった。まともに、センルの顔を真っ直ぐに見ることさえ出来ない。涙が目の奥でじんと滲んだ。
「す、すみません……わたし、なんだか今、混乱してて……とにかくこれは、わたしが自分で片付けたいんです」
「そうか」
ミュシアは服の袖で口許をぬぐうと、洗面器の吐瀉物の上に洗面用のタオルをかけ、下の洗い場まで走っていった。そして彼女は次から次へと涙が溢れてくるのが止まるまで、ずっとその場所にいたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3073ba/

聖竜の姫巫女?

2012年1月10日22時45分発行